

トリエステ危機と「アンシンカブル」作戦

柴 山 太

はじめに

ドイツが降伏し、トリエステ危機が最高潮に達した、一九四五年五月、イギリス軍部は、英首相ウインストン・S・チャーチル (Winston S. Churchill) に作成を命じられた、即座に実行可能な対ソ連用の戦争計画を完成させた。それは、英連邦軍とアメリカ軍の連合軍による、対ソ奇襲攻撃用の戦争計画であった。もちろん、当時、米側がこの計画策定に関与した証拠もないし、また、計画の内容が明らかになったのも最近のことである。この「アンシンカブル」作戦 (Operation "UNTHINKABLE") と命名された戦争計画は、英政府内部での最初の本格的な対ソ戦争計画になった。(1) 1
れ以外の対ソ戦争計画は純粹に研究用であり、その基本は一九五五年以降の英ソ戦争を前提として研究されていた。⁽¹⁾
この戦争計画の実現性を考える際、一九四五年四月二日、米大統領フランクリン・D・ローズベルト (Franklin D.

Roosevelt) が急死し、チャーチルが、実質的に英米側のリーダーとなったことは重要である。ローズベルトのあとを継いだ新大統領ハリー・S・トルーマン (Harry S. Truman) は大統領職の重責に苦しみ、また就任以前たいした経歴もなかった。それゆえ、彼は、チャーチルの華麗なる経歴と経験そしてローズベルトとの深い友情関係を基礎とした「秘密の情報と取り決め」に圧倒されていた。

歴史家ルイスは、ポーランド問題がこの戦争計画立案の動機であると示唆しているが、推測の域を出ていない。当時、ソ連はポーランドをすでに完全に占領しており、同問題はこの戦争計画の引き金になれる軍事的状況をとまなっていない。これに対して、トリエステ問題は、チャーチルのみならずトルーマンも軍事的な衝突覚悟で対応していた問題であった。いわば、引き金になれる軍事的状況をとまなっていた。(トリエステ Trieste は、イタリア語で発音するとヴェネツィア・ジューリア Venezia Giulia という地域の一部分である。なお、英語で発音するとベネジヤ・ギウリアとなる。同地域は、クロアチア語で表現すると *Julijska Kraina* として知られている。本論文では、地名は原則的に、イタリア語の表記とするが、英米人による発言・文書の引用文中においては英語表記を使用する。また、トリエステとヴェネツィア・ジューリアに関しては、文脈に応じて使い分ける。)「アンシンカブル」作戦が、アメリカの参加を不可欠としていただけに、英米両軍が密接に連携して軍事行動を行っていたヴェネツィア・ジューリア問題は「便利な」引き金になりえた。なにより、アメリカは、ポーランド問題で武力行使を考えたことが一度もない。しかし、ヴェネツィア・ジューリア問題に関して、トルーマンは、大統領就任直後を除けば、積極的にアメリカの関与を進めた。ローズベルトが戦後欧州・地中海へのアメリカの関与をあれほど嫌がっていたことと比べて対照的であった。かくて、この地域で、まずはユーゴスラビアとの限定戦争が勃発し、それが触媒となって、ユーゴの後ろにいるソ連との全面戦争に発展するというシナリオは、実現可能性があった。⁽²⁾

とはいえ、本論文は、ヴェネツィア・ジューリア問題だけが「アンシンカブル」作戦立案を促した問題であったとは論じない。むしろ、同問題は、あくまでも可能性のある軍事的引き金候補にすぎない。その裏には、地中海と中・東欧での戦後新秩序の全体的なあり方へのチャーチルの懸念があった。(もちろん、ポーランドもその一部を構成したことは間違いがないが、一九四五年三月、彼はこの問題ではアメリカは動かないと判断していた。)当時、彼は、軍事的手段を行使しても、一九四四年一〇月のパーセント合意、さらには一九四五年二月のヤルタ会談で決められた事実上の勢力圏の線引きをくつがえしたいという願望を持っていた。また、この問題を契機として、トルーマンは、ローズベルトの政策を大転換し、地中海問題さらには欧州問題全般へのアメリカの関与を促進して行った。

さらに、研究者の間では、トリエステ危機をめぐって、第三次世界大戦になるかもしれないという、当時の英米政策決定者の発言がいくつかあったことはよく知られているが、それらは実体がないレトリックや恐怖の叫びとしてあつかわれてきた。しかし、「アンシンカブル」作戦の研究とチャーチルのそれへの固執は、政策決定のレベルで実体が存在したことを意味する。すなわち、それは、第二次世界大戦終結の過程における確執というものでもなく、冷戦の始まりというレベルでもない、熱戦それは第三次世界大戦とすら言いえる状況を惹起させる可能性を持っていたと言わなければならない。このことは、これまでトリエステ問題を大戦終結に関わる確執か冷戦の始まりと位置づけてきた従来の研究アプローチに一石を投じることを意味する。これらを念頭に置きながら、トリエステ危機と「アンシンカブル」作戦に関する叙述を始めることとしたい。³⁾

第一節 チャーチルの後悔とローズベルトという「壁」

ヤルタ会談後、チャーチルは、バルカン半島に関するパーセント合意ならびにヤルタ合意に関して後悔し始めていた。一九四五年三月八日のローズベルト宛の電報で、彼は、ソ連がルーマニアとブルガリアを力づくで支配しようとしていることに懸念を表明した。その一方、彼は、ソ連の指導者ヨセフ・V・スターリン（Josef V. Stalin）が、パーセント合意を遵守し、ギリシヤでのイギリスによる力の鎮圧を容認していることも認めていた。

現在、スターリンは、すべての民主思想と絶対的に反するやり方を、ふたつの黒海バルカン関係国「ルーマニアとブルガリア」で行っている。モスクワでの「一九四四年」一〇月の英ソ交渉以来、スターリンは、紙の上ではヤルタの原則に同意してきたが、「それらは」ルーマニアでは踏みつけられている。にもかかわらず、この見解をスターリンに押し付けて、「彼が次のように」言うことは最も避けたいと思う。「私は、ギリシヤでのあなた方のやり方に干渉しなかった。なぜ私にルーマニアで同じ許容程度を与えてくれないのか？」

チャーチルは、これが合意違反の問題ではなく解釈上の問題であり、彼の解釈をスターリンに押し付ければ英ソ関係が硬化することを理解していた。「どちらもお互いを説得できないだろう。スターリンとの個人的関係を考えれば、この時点で、論争を始めれば、私の失敗になるであろう。」¹

振り返れば、パーセント合意は、化粧をした勢力圏設定に他ならなかった。一九四四年一〇月九日、モスクワを訪問したチャーチルは、スターリンに対して、バルカン各国に関する連合国の関与度合いをパーセントという形で表現した

メモを提示した。連合国の関与といっても、英ソによる勢力圏設定以外の何者でもなかった。その内容は、ルーマニアに関して、ロシアが九〇％で、他国が一〇％。ギリシャでは、英国が九〇％（両首脳討議後の修正で、米国が追加された）で、他国が一〇％（討議後、ロシアと明記された）。ユーゴスラビアとハンガリーに関しては、英ソが五〇％ずつ。ブルガリアは、ロシアが七五％で、他国が二五％という具合であった。さらに、このメモのロシア語版があり、そこには、ブルガリアでの比率が、ロシアが九〇％で、他国が一〇％となっている。また、一〇月二一日付のスターリン宛のメモで（同メモが送付されたかは未確認）、チャーチルは、「パーセント」とは当該地域で英ソがどれぐらいの権力を振るうかのガイドラインと説明していた。同メモは、あくまでも非公式文書であった。この合意には、ポーランドは含まれていない。ポーランドに関しては、ヤルタ会談での、解放欧州宣言の枠組みを遵守するという合意があった。⁵⁾このヤルタ合意は、基本的には、英ソ勢力圏内でも各国国内での最低限の政治的自由を保証するという内容であった。

他方、ローズベルトがポーランド問題解決に本腰を入れないことに、チャーチルは業を煮やしていた。一九四五年三月八日の電報で、ローズベルトが戦後欧州への関与を拒否し、ポーランドの将来に関心を示さないことを、こう皮肉った。「合衆国ではこの問題はどうか受け止められているのか？あなたが個人的にあるいは彼ら「アメリカ市民」が無関心であるとは、私には考えられない。」ポーランドでの民主制実現について、イギリスの外交的努力を述べた後、チャーチルはローズベルトに支援を要請した。「ポーランドが我々両国人民の不合意と誤解の源泉になることを避けねばならない。」これに対して、ローズベルトは、特にポーランドで、ロシア側と事を構えるつもりはなかった。三月一日と一二日の電報で、彼は民主的ポーランドの実現には、ヤルタ合意と外交的手段を重視すべきと論じていた。三月十五日の電報では、パーセント合意を間接的に批判しながら、チャーチル主導の対ソ対決を阻止しようとした。「我々がモスクワ交渉ではまり込んでしまった障害を克服するまで、ヤルタ合意の破棄には同意できない。」結局、チャーチルは口

ーズベルトの力いやアメリカの力に依存していた。明白に譲歩して、彼は「我々の違いはただ戦術上のもの」と伝えた。⁶しかし、その二日後、チャーチルは英外相アンソニー・イーデン（Anthony Eden）宛のメモにおいて、イタリアを「ボルシェビキ伝染病」（Bolshevik pestilence）から救い、さらにイタリア政治への英国の影響力確保のため、「アドリア海の頭」【部分】でのイタリアの「領土」要求」を支援すると意思表示していた。ポーランドからヴェネツィア・ジューリアへと、チャーチルは対ソ上の争点を移動させていた。さらに、彼は、ユーゴスラビアの指導者ジョシフ・チトー（Josip Tito）に対する敵意をむき出しにしていた。「チトーは、彼の山々で、苦いバルカン汁に煮込まれてほしい。」これに対し、イーデンは、この問題で「チトーとの軍事衝突」にイギリスが巻き込まれることに反対した。というのも、チトーは、イタリアとユーゴの間で係争中の領土のほとんどをすでに占領していたからである。⁷

しかし、三月二三日、ソ連がポーランド問題に関する英米抗議を拒否すると、二七日の電報で、チャーチルは、これを利用してヤルタ合意を無効にしようかと、ローズベルトを説得しようとした。二九日のチャーチル宛の電報で、ローズベルトは同問題での対ソ強硬姿勢を取ることに合意した。とはいえ、彼からスターリン宛の電文はチャーチルにも送付されたが、その内容は穏やかなものであった。⁸

振り返れば、ローズベルトは、チャーチルが考える、英米の軍事的圧力を利用しての中・東欧での戦後勢力圏の再編に、決して合意することはなかった。四月一日の電報で、チャーチルはローズベルトに、将来の対ソ交渉上のコマとして、米陸軍がドイツのできるだけ東部に、できればベルリンまで侵攻することを提案した。しかし、四日の電報で、ローズベルトはベルリン占領を拒否した。この大チャンスをあきらめきれないチャーチルは、五日の電報でも同じことを求めた。六日の電報によれば、「我々の陸軍は、数日中に、これまで戦争努力に好都合と思われた以上に「強力」たりえる立場になるであろう」とローズベルトは書いていた。が、実は、当時の彼の健康状態を考えれば、通常草稿を考え

ていたウィリアム・D・リーヒ海軍元帥 (William D. Leahy) が、大統領のチェックなしに送付した可能性が強い。また、この「強力」が対ソ対決を意味するとは考えにくく、歴史家キンボルは、ベルン事件でのソ連による非難に対するものであると解釈している⁹⁾。

四月三日の電報で、スターリンは、英米軍がドイツ側と秘密取引を行い、降伏条件を妥協するかわりに英米軍をより深くドイツ領内に進攻させていると非難した。いわゆるベルン事件である。リーヒは、スターリン宛大統領電報草稿で、この非難に対して「驚愕」(astonishment) という単語を使用し、交渉は存在しないとつっぱねていた。さらに、彼は、この非難自体がアメリカ内部でスターリン自身に対する不信を生んでいると警告した。その厳しいトーンにもかかわらず、ローズベルト自身はこの草稿を承認した。しかも、この電報を送る一日前、四月三日の電報で、アメリカの駐ソ大使であったW・アベレル・ハリマン (W. Averell Harriman) は、ヤルタ会談後に生じた小さな事件の連続に言及し、戦中の米ソ協力は終わり、ソ連はドイツでも極東でも自らの利益を強引に追求すると伝えてきていた。とはいえ、スターリンの和解的な電報を受け取ると、リーヒは米ソ関係を回復するために、ベルン事件を重要視しない電報草案を用意した。実は、ハリマンは、米国側の失望感を印象付けるため、この草稿にあるソ連側の誤解を「大したことがなく」(minor) とした形容詞を削除するように提案した。しかし、ローズベルトは、一日のスターリン宛の電報で、この形容詞を削らずに送付したが、そこにはよりよき将来への彼の願いがこめられていた。¹⁰⁾

第二節 アメリカ政府の政策転換とチャーチルの壮大な構想

一九四五年四月二日、ローズベルトは急死し、それが地中海および欧州へのアメリカの政策を劇的に変化させる最

大原因となった。彼の死後、欧州局長H・フリーマン・マシューズ（H. Freeman Matthews）らの国務省代表は、米陸軍参謀本部に対して、欧州からの米軍の早期撤退というローズベルト政策から、対独戦後もそれなりの兵力を維持するという一大方針転換を伝えた。二四日のメモによれば、この転換に驚いた、参謀本部の戦略・政策グループ長であったジョージ・A・リンカーン准将（George A. Lincoln）は、戦後のヴェネツィア・ジューリアに米占領軍を残す危険を示唆した。地中海地域での占領に反対する理由として、兵站上の問題、他の米軍兵力からの孤立、さらにはこの地域での「複雑な政治問題」に巻き込まれる危険を挙げていた。とはいえ、同メモによれば、米統合参謀本部（The Joint Chiefs of Staff: JCS）が、政治的理由により、象徴的な小規模な部隊を派遣する可能性を考えていた。¹¹

さらに、この転換の重要さに鑑み、リンカーンは「この新政策と「ローズベルト」大統領が明白に述べ彼自身の手で監修したそれ「政策」との間での明白な矛盾ゆえに、国務省から記録に残るなにかを得ておく」必要性を指摘していた。彼のメモによれば、ローズベルトは南・南東欧州での占領に関して米軍参加を一切否定しており、この大統領方針は、一九四四年五月二七日、JCSによりイギリスの参謀長委員会（The Chiefs of Staff Committee: COS）に伝えられていた。同年六月一日、COSはこれを地中海方面連合軍最高司令官（Supreme Allied Commander in the Mediterranean Theater: SACMED）H・メイトランド・ウィルソン英陸軍大将（H. Maitland Wilson）に伝えた。ローズベルト自身がのちに変更した、オーストリア占領への米軍参加以外は、JCSに対していかなる変更も命令されていない¹²。

国務省は、このローズベルト政策を変更し、ユーゴによるヴェネツィア・ジューリア占領を許さないという政策を打ち出した。英側も「米英合同占領軍」と「アメリカの軍政参加」を受け入れると伝えていた。さらに、英米了解として、次の方向が示された。「英米がロシア人に参加を依頼し、ユーゴスラビア人をこの地域から追い出す」ということで「英

米間で」取引が成立している。」¹³⁾

米陸軍の参謀達は、当然のことながら、チトーを追い出す場合、武力行使を行うのかという最も重要な質問を國務省にぶつけた。その答えは、「未決定の問題」というものであった。ただ、ソ連軍がチトー側についた場合の武力行使についてだけは、マシューズ自身が「絶対にしなご」(a categorical 'No')と答えた。¹⁴⁾

國務長官代理であったジョセフ・C・グルー (Joseph C. Grew) は、この一大政策転換に関して、陸軍長官ヘンリー・L・スチムソン (Henry L. Stimson) の支持を獲得しようとした。実は、トルーマンを除けば、スチムソンこそはローズベルト政策に固執する最後の大物閣僚であった。一九四五年四月二六日付の手紙で、グルーはスチムソンに対して、國務省の記録によるとしながら、一九四四年九月一九日、ローズベルトは「連合軍軍政政府」(The Allied Military Government-AMG)を通じて、北東イタリアの占領に「一定数のアメリカ軍政政府用士官および兵員」を参加させてもよいと許可したと伝えた。この承認を明白に拡大解釈して、グルーはスチムソンに対して、ヴェネツィア・ジュリアアでの「連合軍軍政政府」を樹立することを求め、さらに、米英政府は、「できればソ連の合意を得て」同軍政政府が管理する地域からユーゴスラビア軍の撤退を要求するという方針への支持を頼んだ。ローズベルトがあれほど反対した、戦後欧州・地中海へのアメリカの関与が新政策になろうとしていた。一九四五年四月二六日付電報で、SACMED付き合衆国政治顧問であったアレキサンダー・C・カーク (Alexander C. Kirk) は、ワシントンに次の内容を知らせてきた。ウィルソンの後任として、SACMEDになったサー・ハロルド・アレキサンダー英陸軍元帥 (Sir Harold Alexander) と地中海方面連合国司令部付き英大使 (British Minister Resident at Allied Force Headquarters, Mediterranean Theater) ハロルド・マクミラン (Harold Macmillan) は、ユーゴ軍がヴェネツィア・ジュリアを占領することを防ぐために必要な英米軍が確保できていないと懸念しており、彼等は「チトーとの戦争状態に迷い込む」こ

とを避けねばならないとしていた。¹⁵

これを避けるため、米陸軍省の作戦課 (The Operations Division, O. P. D.) は、アレキサンダーへの命令書のなかに、「当該地域内でユーゴ人に究極の手段を使用する前に」英米連合参謀本部 (The Combined Chiefs of Staff, C. C. S.) と必ず協議するようにという一文を入れようとした。C. C. S. は、J. C. S. と C. O. S. から構成されているため、米軍首脳が武力行使を止めることが可能であった。四月二七日に関する限り、米陸軍参謀総長ジョージ・C・マーシャル元帥 (George C. Marshall) は、まだこの挿入を承認せず、リーヒの意見を待っていた。同日の電報で、チャーチルはトルーマンに対して、政治的混乱を避けるために、「チトーのゲリラ達」が来る前に、可及的速やかに英米軍がヴェネツィア・ジュリアを占領する必要があると迫っていた。¹⁶

四月三〇日のメモによれば、グルーは新大統領にヴェネツィア・ジュリア問題での特別協議の開催を求め、リーヒ、マシユーズ、そして国務長官特別顧問であったウィリアム・フィリップ (William Phillips) が同席した。この会合において、トルーマンは、チトー軍を追い出すための米軍使用に躊躇を示した。さらに、彼は、米国がバルカン問題に首を突っ込むことにもためらっていた。しかし、彼は、アレキサンダーへの「現在の一般命令」によれば、この英人司令官がイタリアのいかなる場所でも米軍を使用できると認めていた。この時点では、アレキサンダーは、英連邦軍に対して「トリエステに向かつて東進せよ」とだけ命令していた。トルーマンは、国務省に対して、「アメリカ軍は、ユーゴ軍と戦うためあるいはバルカン半島での政治目的のために使用されてはならない」という内容のチャーチル宛電報草稿を用意するように命令した。三〇日、トルーマンは、表現をすこし弱めた電報をチャーチルに送った。その意味では、トルーマンは、まだこの時点では、ローズベルトの政策を継承しようとしていた。が、のちには、彼はその考えを変えた。¹⁷

スチムソンも政策転換に反対し、米陸軍参謀本部がチトー軍さらにはソ連軍との武力衝突を恐れていると強調していた。そして、三〇日のメモで、「我々は東地中海にわが同胞を関与させないできたが、特定の目的以外で、彼等をイタリアに踏み込ませないように注意深く制限」すべきと、彼は主張していた。彼はグルーに対して、これがチャーチルによる米軍の東地中海関与を促すわなであるかもしれないとし、マーシャルも「このことを心配」していると付け加えた。さらに、チトー軍と武力衝突になった場合、ソ連軍の介入は意外と素早いかもしれないと警告していた。¹⁸

チャーチルにとって、ローズベルトの急死は個人的に悲劇であったが、イギリスの大戦略に関しては、一大チャンスとなった。チャーチルが、副大統領あがりの経験なきトルーマンを手玉に取れる可能性は高かった。かくて、チャーチルはトルーマンに対して、欧州・地中海での政治的・軍事的展開に関する情報を津波のごとく送りつけ、彼が考える将来の欧州・地中海構想を受け入れるように圧力をかけ始めた。イーデン宛の四月二〇日付の電報で、チャーチルは「新しい男はソ連人にいじめられないだろう」と期待を表明し、さらに、ロシアとの「永続的友情」は彼等が「英米の力」を認めることから始まると述べていた。と同時に、彼は、「チトランドでソ連との負け試合」をやる気はなく、アドリア海周辺に関する英米そしてイタリアの利益を追求すると表明していた。¹⁹

四月三〇日、チャーチルはトルーマンに、「ソ連政府が後盾の」ユーゴスラビアがヴェネツィア・ジューリアを占領し主権を主張するまえに、英米側が占領することを提案した。また、彼は、中部ドイツから米軍が撤退すれば、イタリアの共産主義者、ユーゴスラビア、そしてソ連に抵抗しようと思っている、イタリアとその近隣諸国の人々を落胆させてしまうと警告していた。この電報への返答は、前述したトルーマンの同日電報であり、米軍の関与を避けようとしていた。しかし、チャーチルは、トルーマンに厳しい欧州・地中海情勢を伝え続けた。三〇日のもうひとつの電報で、チャーチルは、トルーマンがドワイト・D・アイゼンハワー米陸軍元帥 (Dwight D. Eisenhower) に命令して、米陸軍

をプラハと西チエコスロバキアの解放に向かわせなければ、チエコスロバキア全体はソ連側の手に落ちると警告していた。同日、アレキサンダーはCOSに、彼の指揮下にある「第一五軍団 (Fifteenth Army Group) がベネジヤ・ギウリア「ヴェネツィア・ジューリア」にまさに進入しようとしている」と打電した。²⁰⁾

しかし、トリエステとゴリツィア (Gorizia) 経由でオーストリアへの連絡線を確保しようとするアレキサンダーの意図は、チトーの頑固な態度のために頓挫する。チトーは、アレキサンダー指揮下にユーゴ軍を置くことをまず拒否し、一方的に「イゾンツォ川 (The Isonzo) の河口からゴリツィアとトルミノ (Tornino) を経由してタルヴィス (Tavris) に至る西側作戦線」を確保すると通告していた。三〇日の電報で、アレキサンダーはチトーに対して、無用な武力衝突をさけるために、英側の作戦意図を明白にした。英側は、トリエステの一部とイタリア領 (実はこれも係争中) を経由してイタリア本土への連絡線の確保、トリエステからゴリツィアとタルヴィーズイオ (Tavrisio) を経由してのオーストリアへの連絡線の確保、さらに、ポーラPula (Polaとどう綴りもあり、クロアチア語表現ではプーラと発音する) の港湾とポーラとトリエステの間にあるイストリア (Istrian) 海岸の停泊地およびこれらへの連絡線の確保を挙げている。五月二日、アレキサンダーはチトーの返答を受け取った。それには、チトーは、イストリア、トリエステ、メンファルコーネ (Mentalcone) を「解放」するとし、さらにオーストリア国境に向かってイゾンツォ川沿いを進むと書かれてあった。これらふたつの作戦方針が明白に衝突することを理解したCOSは、五月三日の電報 (COSMED 二二〇) で、アレキサンダーに対して、「貴軍とチトー元帥軍との間での「武力」衝突の危険は非常に大きい (very real)」と警告し、彼の指揮下の各司令官に「自己防衛」(in self defence) 以外では、ユーゴ軍との戦闘を行ってほしくない」と指導するように命令した。と同時に、COSは彼に対して、ユーゴ軍が到着する前に「係争中の領土」をできるだけ広く「物理的に確保」するようにも命令していた。²¹⁾

また、チトーの挑戦は、米政府をショック状態に陥れていた。五月二日のメモによれば、マシユーズはグルーに対して、ユーゴ側がこの地域を軍事占領すれば、イタリアのみならずイタリア系アメリカ人も承知しないであろうと警告した。さらに、彼は、「疑いもなくチトーの返答はロシアの指導に基づいている」と強調し、これに関する大統領宛の國務省メモを準備中であると伝えた。スチムソンもまたチトーの返答にショックを受けて、五月三日のグルーとの電話会談で、「これは、もちろん、安全な状況ではなく、いつ爆発してもおかしくない」と発言していた。しかし、彼は、まだローズベルト政策の継承を望み、グルーに対して、米軍投入以外の選択肢を探るように要請した。「アメリカ人民は、米兵がバルカン半島で失われてはならないと言うだろう。」その一方、スチムソンと米陸軍省は、このとき、アレキサンダー指揮下の米軍の正確な位置を確認できておらず、グルーをバニツクに陥れていた。後者はスチムソンに次のように述べた。「わが軍とチトー元帥軍の間で武力衝突の危険が非常に大きいのは明白。」スチムソンは、チャーチルがチトーとの対決に消極的に違いないと述べるが、グルーはチトーとの対決姿勢を促すチャーチルの四月三〇日の電報に言及し、スチムソンを失望させていた。五月三日、マーシャルは、「米統合参謀本部は〔五月三日付電報〕COSMED二二〇に規定されている行動に合意する」という内容の電報を英側に送ることに關してリーヒの承認を求め、彼はそれを承認した。五月三日の電報で、マーシャルは、地中海方面連合軍副司令官であり地中海方面アメリカ軍司令官であったジョセフ・T・マクナニー米陸軍大將 (Joseph T. McNarney) に対して、「大統領は、ベネジア・ギウリア〔ヴェネツィア・ジュリア〕での連合軍軍政政府樹立のために、米軍兵力がユーゴ軍兵力との戦闘で使用されてはならないと命令した」と知らせた。さらに、國務省は、武力以外で、イストリア半島からユーゴ兵力を撤退させる方法を考案しているとも伝えた。翌日の返答で、マクナニーは「イゾンツォ〔川〕の線」で作戦するというチトー宣言の裏には、「ソ連の保証 (assurance)」があると確信すると述べていた。同日、アレキサンダーは、CCSに対して、「状況は微妙だが」

まだ軍事衝突は起こっていないと打電していた。⁽²²⁾

五月四日の大統領宛メモで、ゲルーは、「イタリア、特にその北部において、秩序を保つために、もしくは市民に対して武力行使、またはその過程においては「他国の軍事」部隊に対して、米軍部隊を使用する可能性」に対応すべきとした。アレキサンダーによる五日のC O S宛電報によれば、チトーは彼の占領地を将来のユーゴ領と宣言していた。そして、この情報はすぐに米側に伝えられた。同日、カークはワシントンに対して、一九三九年のイタリア国境から米英軍が撤退することは「アメリカと世界世論にとっては、我々がいつも維持してきた原則を放棄したと解釈」され、⁽²³⁾と警告した。

一方、五月六日のトルーマン宛電報で、チャーチルは中・東欧での英米軍侵攻の驚くべきスピードに関して喜びを爆発させていた。彼は、これをうまく利用して、将来の欧州・地中海秩序を彼が考える構想に誘導しようとしていた。

我々は、すでに獲得した地域や、ユーゴスラビア、オーストリア、チェコスロバキア、「欧州」中央のアメリカ「責任」戦線そしてデンマークを含むリユーベックまでのイギリス戦線で我々の陸軍が獲得しつつある地域をしっかりと確保しなくてはいけない。次の数日間、「英米の」捕虜を救うために、両陸軍にとってはまだ占領すべきところはいっぱいあるであろう。……したがって、ソ連に対する我々の態度を真剣に考え、どれぐらい我々が彼等に譲りまたは撤退するかを提示しなければならないと思う。

ドイツが降伏した七日、C O S（V C O S参謀次長委員会レベル）は、英軍内部の戦後計画委員会（P H P）が出していた「最も急迫な「ソ連の」脅威は「東地中海を含む」中東に向けられるであろう」という警告を取り上げ、英陸海空

三軍に対して次の六ヶ月を念頭に、中東防衛準備を「最高レベル」(to full efficiency)まで向上させるように命令した。²⁴⁾ アメリカでは、國務省を中心に、バルカン不関与というトルーマンの方針への反対が強まりつつあった。五月八日の会議で、グルーは、スチムソンと海軍長官ジェームズ・V・フォレストル (James V. Forrestal) に対して、チトー軍が「イゾンツォ川に到るゴリツィア省 (Province)」まですでに確保し、自主的にこの地域を放棄する意図は全くないようであると報告した。ただ、この時点では、米政府の立場は、チトー軍との衝突やバルカン半島での政治目的に米軍を使用しないというトルーマンの立場を踏襲していた。しかし、スチムソンとフォレストルに対するメモのなかでは、國務省は、この立場を長く保つことが難しいと断じ、ユーゴ側が主要なイタリア人の逮捕・監禁を含むテロ的手段に訴えていることをその理由に挙げていた。五月八日のメモで、カークは、アメリカがこの地域でのチトーのテロと暴力に對して立ち上がるべきとし、チトーのやり方を日独伊の侵略方法と同等と述べていた。九日、彼は、チトーの一方的な占領方針に対して、アレキサンダー元帥が一切の譲歩をしないと決め、英米政府が合意すれば、チトー軍をヴェネツィア・ジューリアから排除するとワシントンに伝えた。すべては、チャーチルとトルーマン次第という展開になっていた。²⁵⁾ ここにおいて、五月一〇日のメモで、グルーはトルーマンに対して、チトーによるヴェネツィア・ジューリア支配は、ユーゴの地域的な野望やイタリア混乱の問題ではなく、戦後欧州でのソ連による権力拡張への野心を表すものと断言した。それは、チャーチルの心配と全く同じ内容であった。

イタリアの安定と、ロシアと関連してこの国「イタリア」の将来の方向が危うくなっているが、現在の問題はイタリアかユーゴスラビアのどちらに論争で味方するかバルカン半島の内政に関与するとかの問題ではない。問題は、本質的に、我々はソ連政府が「つぎのことを」行うことを許容するかどうかである。「すなわち、」ソ連の戦線

にある、ポーランドの領土確定を直接行うこと。地中海（英米）方面では、その衛星国たるユーゴスラビアを使用していること。ソ連の将来の権力のために最も好都合な国家と国境を画定しようとしていること。中部欧州の多くの地域にとって死活的な出口である、トリエステに対するユーゴスラビア（ロシア）占領は、直接関係している領土以上に最も広範囲な結果を招来することになるであろう。

さらに、彼は、ソ連の領土拡大のやり口は、究極的に「全欧州そして世界を戦争に」陥れると警告し、「欧州大陸に展開している何百万の「米英」部隊の力で」欧州の将来を取り戻すアメリカのイニシアティブを要求していた。同日、グルーは個人的に、「トリエステをロシアの将来の港とするために、チトーの動きの後ろには疑いもなくロシアがいる」と大統領に訴えていた。⁽²⁶⁾

とうとう、トルーマンは、自らの立場を変更したとグルーに告げた。これは、ローズベルト以来の米戦時外交の一大原則が変更されたことを意味する。五月一〇日の会見録によれば、

大統領は、彼がこの問題に対して最も真摯な考慮を行い、唯一の解決法は「彼等を追い出す」ことであるという結論に最後に達した、と答えた。彼は、これが彼の以前の立場を逆転させるものであるが、状況の中で他に選択肢が残されていないと悟っていた。

一日、マーシャルは、「アレキサンダーが行動に関するはつきりした命令を出す」前に、大統領がチトーに対して英米による強力な警告を与えることを提案した。トルーマンは、これらの警告が「非常に強力」な内容であるべきだと述

べた。この警告は、武力行使以前の「最後通牒」的性格のものであった。²⁷

チャーチルも、グルーと同じ内容の提案を行っていた。それも、当時の英米軍の有利な軍事的立場を最大限利用して。同日の電報において、チャーチルはトルーマンに対して、「次の二ヶ月、世界の最も重要なことが決せられるであろう」と断言した。チャーチルは、ソ連側と取り決めた占領地域に関する線引きをはみ出して、英米軍が占領している地域から撤退しないように、トルーマンに懇願していた。同電報では、この外交的に有利な軍事的占領を無為に失うことは、ソ連の全欧州支配につながると警告していた。²⁸

ケベックで米ロが取り決めて、そこで我々が地図上に黄色で示した占領線まで、合衆国陸軍が提案どおりに撤退することは、ロシア支配の波が三〇〇〜四〇〇マイルの戦線で一二〇マイル前進することを意味する。そうなれば、この出来事は歴史における最大の憂鬱のひとつとなるであろう。ロシア人がその地域を占領すれば、ポーランドは完全にロシア占領地域に沈み込み深く埋められるであろう。ロシアの国境は、実のところ、ノルウェーのノースケープから、フィンランド・スウェーデン国境沿いに、バルト海を横切りリューベックの東をかすめ、現在合意されている占領線を通り、ババリアとチェコスロバキアとの国境を抜け、普通は四方国占領になるはずであるオーストリア国境まで、さらにこの国「オーストリア」を分断し、チトーとロシアがその東全部を主張するイゾンツォ川までということになるであろう。かくて、ロシア支配の地域は、バルト地域、占領線までのドイツ、全チェコスロバキア、オーストリアの大部分、全ユーゴスラビア、ハンガリー、ルーマニア、ブルガリアを含むであろう。（現在ふらふらの状況にあるギリシャに到着するまで。）それは、ベルリン、ウィーン、ブタペスト、ブカレストそしてソフィアを含む中部欧州のすべての偉大な首都を含むであろう。トルコとコンスタンチノーブルの地位は確実かつ

すぐに討議の対象になるであろう。²⁹⁾

ここで、チャーチルは、英米が現在保有している有利な軍事的状況を利用して、ポーランド、ドイツ、ハンガリー、オーストリア、チェコスロバキアそしてバルカン半島の問題を一括で英米側に有利に解決することを提案した。それは、戦後における、ソ連勢力の東欧とバルカン半島からの放逐を意味した。言い換えれば、ソ連が一九四一年の勢力圏へと後退することであった。それは、パーセント合意の範囲をはるかに超えていた。そして、唯一の譲歩として、チャーチルは、トルコの二海峡を通りソ連が地中海に出てくる権利と、バルト海から北海に出てくる権利を与えることを考えていた。さらに、「アンシンカブル」作戦との関連で興味深いことは、このチャーチルの解決案をソ連が受諾できない場合には、第三次世界大戦もありうるという前提をトルーマンに飲ませようとしたことである。

我々は、いくつかの強力な交渉力を持っており、それらの使用は平和的合意を可能にする。第一、ポーランド、ソ連によるドイツ占領の一時的性格、特にハンガリー、オーストリア、そしてチェコスロバキア等のダニューブ渓谷、およびバルカン半島でロシア化またはロシア支配下の国々で樹立されるべき状況に関して、「英米」同盟 (the Allies) が満足する「結果を得られる」まで、現在の占領地域から「規定された」占領線まで撤退してはならない。第二、我々は、黒海とバルト海からの出口に関することを、全体講和の一部とすることで彼等を喜ばせることができるだろう。欧州の合衆国軍が弱体化するまでだけという条件下で、これらすべての問題は解決できるであろう。合衆国軍が欧州から撤退し西側世界がその軍事力を縮小する前に解決されなければ、満足できる解決見込みはなく、第三次世界大戦を防げる可能性はほとんどなくなる。このロシアとの早めのそして素早い対決と講和に、今、

我々の希望を賭けなくてはならない。

ここでは、彼はまだ次のように述べてポーランド問題での英米共闘を求めていた。「とにかく、ポーランドのために、私はロシアに対して我々の立場を弱めることに反対する。」³⁰⁾

五月一二日の電報で、トルーマンはチャーチルに、「力や脅迫や脅しに反対し、秩序だったプロセスにより領土問題を解決する基本原則」を守るといふ見地から、ユーゴによるヴェネツィア・ジューリアの軍事支配に対抗するというアメリカの決意を伝えた。一〇日の國務省の立場と彼自身の決断に基づき、トルーマンは、中欧のほかの問題を解決するための例として、この問題での英米パートナーシップを強調した。

問題は、我々二カ国が、我等の同盟国に、ヒトラーと日本を思わせる、無軌道な領土略奪や「その」戦術を許可するかどうかである。当該地域の核であり、中部欧州の多くの地域にとつて死活的な出口であるトリエステを、ユーゴが占領することは、当面の関連地域以上に広範囲な影響を及ぼすことになる。「これに」あなたが同意することはわかっている。

さらに、トルーマンは、この問題をポーランド問題とも関連付けて、英米合同という形でスターリンに圧力を加えることも提案していた。チャーチルは、この提案を喜んだ。「おっしゃるすべてに賛成で、あなたの提案に沿って全力をかけて努力します。」また、彼は、これらの問題解決が、より安定した戦後欧州秩序とより頼れる国際連合を実現することに繋がると述べ、「欧州がもうひとつの流血から救われる」とまで持ち上げていた。³¹⁾

そのうえで、チャーチルはトルーマンに対して、後者がとにかく次の数週間、欧州から米陸軍および陸軍航空隊の部隊を動かさないという「停止命令」を出すように懇請した。さらに、彼は、ユーゴとの限定戦争になった場合、トルーマンがどれぐらいの米軍兵力を提供できるかを尋ねていた。

アレキサンダーの「電報」NAF 九五九は、ユーゴスラビアとの戦闘時、彼の部隊である第一五軍団のどの部隊が彼の指揮下にはいるのかを緊急に訊いている。「現在は、」彼は使用可能な兵力として、七個米師団、四個英師団、一個ニュージールランド師団、一個南アフリカ師団、二個イギリス・インド師団、二個ポーランド師団、そして一個ブラジル師団、合計一八個師団を持っている。疑いもなく、これらが彼の指揮下にはいれば、我々「両」政府が命令するかもしれないすべての政策実行に関して、彼は自信を持てるであろう。

これは、アレキサンダーが英人であったがゆえに、トルーマンにこの限定戦争に関する白紙委任状を求めるに等しかった。⁽³²⁾

五月一三日のニュージールランド首相宛の電報で、チャーチルは五月一二日付のトルーマン電報を「我々が欧州で戦いかつ勝ち取った大義の道徳的特質」を体现する「最も顕著な文書」と褒め上げた。さらに、チャーチルはトルーマンを、ローズベルトとは異なり、米国内の孤立主義を抑え、欧州問題解決へのアメリカの責任を受け入れた新指導者と賞賛していた。「このことは、新しいリーダーの下で、欧州に巻き込まれるとの非難も恐れず、強く大胆な行動をアメリカが行う用意があることを示している。」また、このニュージールランド首相宛電報で、彼は、「ポーランド、オーストリア、チエコスロバキアそしてユーゴスラビアの独立と主権」に関する問題で、英米共同でスターリンに圧力をかけて譲歩さ

せる決意を明らかにした。それに加えて、チャーチルは、スターリンに圧力をかけて、チトーに譲歩を迫ることを提案していた。五月一四日の電報で、チャーチルはトルーマンに、ユーゴによるトリエステ占領を阻止するために、英米兵力を使用する覚悟があるという電報をスターリンに送付してもよいかと尋ねた。³³

チャーチルとトルーマンが武力行使に向けた政治決断を行っていた頃、皮肉にも、アレキサンダーはCCSに対して、ユーゴ軍を追い出すことは、とりわけソ連が支援した場合は、かなり難しいと警告していた。五月一日の電報で、彼は、対抗するのに「必要な」兵力量は「主として、ロシア人がチトーを支援するかどうかによって決定される」と述べていた。たとえソ連の物質的支援がなくても、チトー軍を排除するのに「合計で一一個師団」が必要と判断し、さらに、「米英部隊は、戦争のこの時期、ユーゴ人との新たな戦いを非常に嫌がる」と、彼は予想していた。それ以上に、もしソ連が参戦すれば、彼の部隊は対応できないと、彼は警鐘を鳴らしていた。

ロシア人がチトーを支援すると決めたら、その支援「内容」は直接的戦闘参加から、チトー指揮下でチトー型志願兵方式の作戦を行うそれ「内容」までの違いがありうる。いずれの場合でも、「これらに対抗するのに」必要とされる「軍事的」資源を算定することは不可能である。「必要兵力量は、」私がこの戦線で使用できるすべてを明白に超過している。

すなわち、ヴェネツィア・ジュリアの軍事情勢は、チャーチルが考えているほど英米にとって有利なものではなかった。しかし、五月一二日の電報で、CCSはアレキサンダーに対して、どのようにチトー軍との戦闘が始まるべきかという指針を伝えた。すなわち、この武力衝突は、「ユーゴスラビア人による、貴軍兵力に対する攻撃の結果という形に

おいてのみ」始まらなくてはならず、そのための準備を周到に進めるようにというものであった。⁽³⁴⁾ 実は、この方針を提案したのは、JCSであった。⁽³⁵⁾

五月一四日のチャーチル宛電報によれば、トルーマンは、ドイツ占領におけるソ連の意図が明白になるまで、米軍の太平洋戦線への移動「停止命令」を発令する気がなかった。が、その一方で、ヴェネツィア・ジューリアに関して、チトーが戦闘行為を最初に行うことを条件に、限定戦争への承認をチャーチルに与えた。

チトー軍が「先に」攻撃しなければ、私はこの国「アメリカ」をもうひとつの戦争に関与させることはできない。チトーが敵対的行動を取り、いかなる場所であってもわが連合軍部隊を攻撃すれば、アレキサンダー元帥は彼の指揮下にあるすべての国籍の部隊を必要だけ使用すると考えている。

しかし、このアメリカのコミットメントは、英側には十分とは言えなかった。⁽³⁶⁾

第三節 チャーチルと「引き金」

五月一四日付の報告において、イーデンはチャーチルに対して、チトーが英米共同の撤退要求に従わない場合にどうするかについて、アメリカ人は最終的にはまだ決めかねていると警告していた。また、同日付のもうひとつの報告で、イーデンは、中・東欧に関するトルーマン、リーヒ、そしてグルーらとの会談の内容を伝え、トルーマンはポーランド問題に関して「我々はこの問題の解決を得る事はできない」と述べ、かなり悲観的になっていると報告していた。トル

ーマンを、ポーランド問題に関して、武力行使に巻き込む見込みは限りなく小さくなっていった。しかし、トルーマンは、ヴェネツィア・ジューリアに関しては、はるかに積極的であり、この問題は「ポーランド以上に心配ですら」あると認めていた。とはいえ、彼は、ベルグラードでの英米代表団とチトー側の交渉に最後の望みをかけていた。グルーは、この問題では積極的であったが、戦闘が起これば国際連合樹立に関するサンフランシスコ会議に悪影響がでると懸念していた。リーヒもまた、英米軍の存在と外交的努力で、チトーが譲歩することを期待していた。この会議に参加していたクレメント・アトリー英副首相 (Clement Attlee) は、ユーゴ側が占領している地域に対する、英米軍側の演習でチトーに正気を取り戻させることができると示唆した。これを聞いて、トルーマンは、「我々はじめられることにあきあきしてきた」と発言した。リーヒは、戦線において、とりわけ「捕虜と解放された地域へのアクセス」に関する問題で、ロシア人が英米側を全く信頼していないことを嘆いていた。⁽³⁷⁾

チャーチルは、彼が考へてる方向にアメリカを誘うためには、最後の一押しが必要と判断した。彼は、チトーの直接攻撃ではなく、チトーが英米の占領計画を拒否しただけで、限定戦争開始のための十分な戦争理由になる、いやなるべきだと考へるようになっていた。五月一五日の電報で、彼はトルーマンに対して、戦争理由の内容を文字通りの戦闘開始からチトーによる占領の固執に変更しようとした。「私はこう思っている、彼「チトー」がこれらの地域を長期にわたり不法占有し、それに固執すれば、「それは」(引用) 攻撃(引用終わり)を構成するであろうと。」チャーチルは、まだ出口を求めアメリカから、出口をなくそうとしていた。彼とイーデンは、チトーの拒否は戦闘行為を必ずしも意味しないと考へるアメリカの理解に反対していた。この変更提案に驚いたトルーマンは、一六日の電報で、彼が意味する戦闘とはまさしく戦闘であり、それ以外ではないと返答していた。「明白なのは、ユーゴスラビア人が我々を攻撃しなにかぎり、私はこの国「アメリカ」を彼等との戦争に関与させることはできないし、したくもない。⁽³⁸⁾」

チャーチルにとって、中・東欧でのイギリスの権益は、太平洋戦争へのソ連の早期参加という、アメリカの軍事的必要によつて妥協されてはならないものであった。彼は、これがトルーマンの「及び腰」の理由と考えていた。駐米大使であったハリファックス卿 (Lord Halifax) 宛の一四日の電報で、チャーチルは次のように述べていた。「我々は、できるだけ早期のソ連の対日参戦を望んでいる。「しかし」、「彼等」[ソ連]の極東での大きな権益からして、中欧やバルカン半島での自由と正義の支配を後退させるというコストを払つてまで、彼等にお願ひしたり、彼等から買ひ取つたりすべきものではない。」また、同日のトルーマン宛電報で、チャーチルは、太平洋戦線のために欧州から米軍を早期に撤退させれば、スターリンがドイツでなにをしてくすかわからないと警告していた。その一方で、チャーチルは、米軍撤退のペースは「八月か九月まで一ヶ月に五万人」を超えないし、対日戦用の輸送がすでに限界に達し、米軍は新たな兵力移動が困難になつてゐるというレポートに気をよくしていた。五月一五日の電報で、チャーチルはスターリンに、英米側はチトーに対してヴェネツィア・ジューリア西部からのユーゴ軍部隊撤退を要求したと伝えた。チャーチルは、欧州での強力な米軍駐留だけが、ソ連とその衛星国による主要軍事行動を阻害できると固く信じていた。一六日の電報で、彼はアレキサンダーに対して、英米軍側がさらなる援軍を投入することで、ユーゴ側に圧力を加えるように命令した。「かくて、「対」ユーゴスラビア戦線にさらなる兵力集中がなされることを希望する。なぜなら、チトーあるいは彼の後ろにいるロシアは、米軍が欧州にゐる間は、大規模な「軍事」衝突を引き起こすとは信じられないからである。」これに対して、アレキサンダーは、彼の部隊の士気を保つため、なにか起こつてゐるのかについて正直に伝える必要があると述べるとともに、次の命令を彼の指揮下にある部隊長に下した。「チトー元帥の部隊を南オーストリアと北イタリア全域または「その」一部から追放するための作戦実行が、すぐに必要になるかもしれない。この行動の目的は、チトー元帥に、軍事力と軍事占領によつて、現ユーゴ国境を越える特定地域の保有を実現しようとすることは許されないと悟

らせることである。³⁹⁾

実は、アメリカの政府と陸軍は、ユーゴ側と対決するため、強力な特別部隊の派遣を考慮し始めていた。五月一七日のメモで、マーシャルはトルーマンに対して、アイゼンハワーの「予備的」考慮は、アレキサンダー指揮下の部隊のほか、ジョージ・S・パットン・ジュニア大将 (George S. Patton Jr.) に新たな五個機甲師団を率いさせ、チトー側に圧力をかけられる地域まで進出させることであると報告した。緊急事態限定とは言うものの、マーシャルは、パットンが率いる五個師団をアレキサンダーの指揮下に置くこと、すなわち、事実上のイギリス指揮下に置くことを付け加えた。一七日、マーシャルはマクナニーに対して、大統領が「チトーとの戦端を開くことに懸念」を示しているものの、彼はまた「ユーゴスラビア人の行動の受容に関して、できることには限界があると感じている」ことを伝えた。さらに、「アレキサンダーにパットン指揮下の数機甲師団の援軍を派遣するという提案に、アイゼンハワーが合意すれば、アイゼンハワーは英米連合参謀本部と議論する前に、アレキサンダーと非公式に討議するかもしれない」と伝えた。一八日、マクナニーは、「提案されているその行動で問題をうまく解決できるかもしれない」と返答していた。⁴⁰⁾

米側は、トリエステだけでなく、オーストリアとプラハでのソ連側の態度にいらいらを募らせていた。五月一六日の会議において、グルーとハリマンはイーデンの前で、ソ連が米英側代表によるウィーン・プラハ訪問を拒否したことを強く非難していた。同日の電報で、トルーマン自身がスターリンに直接、後者がハリマンに四月一三日に約束したことを反して、英米代表がソ連側によりウィーン訪問を拒否されていることを伝えた。同日の電報で、チャーチルはチトーに対して、ヴェネツィア・ジュリアに関して大きな譲歩をするように迫っていた。⁴¹⁾

この文脈において、チャーチルは、限定戦争を開始する基準を下げようとした。彼はトルーマンに、英米軍の安全確保のためにより強い行動を取ることを求めた。五月一九日の電報で、チャーチルはトルーマンに、オーストリアとヴェ

ネツイア・ジューリアにおいて英米軍兵士のフラストレーションが高まっているという、アレキサンダー報告を伝えた。さらに続けて、「アレキサンダーによる軍政機能を適切に確保するための行動は、（引用）ユーゴスラビア人との戦争（引用終わり）を意味しない」とし、限定的な戦闘行為容認の立場を明白にした。しかも、彼は、英米軍は最初に撃たないことを徹底させると保証し、トルーマンがこの戦闘行為容認に反対しにくくしていた。実は、トルーマンは、このチャーチルのリスク容認を不安がっていた。一九日、前駐ソ大使であったジョセフ・E・デービス（Joseph E. Davis）に對して、トルーマンはスターリン対応と同じぐらい「チャーチル首相とも難儀」があるとし、「彼等の両方とも火中の栗を拾おうとする猫のつめ [THE PAW OF CAT—手先になる人の意] であり、そして猫のつめになるぐらいなら、私は猫ではなくつめになるだろう」と述べていた。要するに、トルーマンからすれば、チャーチルとスターリンは、トリエステ問題に関して本気でないので火遊びをしているにすぎず、本当はトルーマンだけが必要となれば、大きな軍事行動を行う準備があると明白にしたのであった。歴史家ハインリックスによれば、同日、グルーはトリエステ危機が最高潮に達したせいで心配で眠れず、明け方ソ連の野心を「さわめて危険視」する私的メモを書いたという⁴⁴。

五月二一日の電報で、トルーマンはチャーチルの限定的戦闘行動許可の立場を承認した。そして、米軍の援軍派遣に鑑み、トルーマンは、同地域でのアレキサンダーの指揮独占よりも、アイゼンハワーの指揮系統への参加を提案した。それと同時に、英米側から戦端を開くことが決してないように、最大限の慎重さを求めていた。

疑いもなく、わが指揮官達は、彼等の部隊が危険な（intenable）軍事的状況に陥らないように、必要な用心をしているにちがいない。しかし、これを防ぐうえで、我々は我々のリーダー達に、明白な「軍事」行動があるとすれば、チトー軍部隊から始まることを保障するように、最大限の用心深さを持つべきことを、明白にしておかねばな

らない。

もし起これば、この軍事衝突が地域的国境紛争事件で終わる可能性を、トルーマンは疑問視していた。「強大な軍事力の誇示は、チトーを正気に返させるかもしれない。しかし、戦闘行動が始まれば、それは国境紛争事件として考えられるのかどうかは疑問である。」ここで、アレキサンダーへの援軍派遣に合意しつつも、トルーマンはチャーチルに対して、アメリカは太平洋戦争をできるだけ早く終わらせなければならぬというディレンマを吐露していた。「私は、太平洋への米軍兵力の再配置に影響を及ぼす、避け得る妨害に巻き込まれてはならない。」^⑧

チャーチルは、トルーマンの国境紛争事件として終わらないという懸念を、スターリンに圧力をかける英米軍事力誇示に結び付けようとした。五月二一日の電報で、チャーチルはこう述べた。「我々の「戦力」配置が強力であれば、戦わずして解決に至る可能性が非常に高いと思う。この問題での我々の強い立場は、スターリンとの討議で価値があると信じている。」チャーチルは、太平洋への英米軍の再展開とその後の動員解除が、スターリンによる欧州での強力なソ連の地位確立に繋がってしまうと心配していた。スターリンの欧州支配を防ぐために、チャーチルは、平和会議ですべての主要国境問題を解決できる、安定した欧州秩序を英米側が確立することが必要だと主張していた。トリエステ問題に関する、トルーマンからスターリンに送られる予定の草稿メッセージに言及しながら、チャーチルは、英米側がこの問題を平和会議で議論される他の欧州国境問題と分離して議論しないように念を押していた。五月二一日の電報で、トルーマンはチャーチルに、「アングルジョー」「スターリン」が彼の影響力を行使して、ベネジア・ギウリア「ヴェネツィア・ジュリア」でのチトー問題解決に尽力してくれたらとの希望」を表明していた。二二日のハリマンらとの夕食会で、チャーチルは個人的に「ロシアとの関係に深い憂慮」を表明し「ベネジア・ギウリア状況で、強い立場を貫き通

すことが最重要」と述べた。興味深いことに、チャーチルは「ポーランドのような基本的な問題」は、スターリンとの直接会談まで解決できないと考えていた。米側は強硬姿勢を明確にし、トルーマン自ら「ポーラとイストリア [Istria] 西岸の諸地域」に英米連合軍の軍政政府を樹立することに固執し始めていた。しかし、アレキサンダーは、この要求を「最も歓迎しないコミットメント」と呼んだ⁽¹⁴⁾。

ここで、トルーマンは米ソ関係の急速な悪化を恐れ、英米の連帯重視から、英米ソ関係の中でより調停役を務める方向に舵をとり始めた。五月二二日付けのトルーマン日記によれば、次のように英米ソ協調の達成への決意を書いていた。「無理がない永続的な平和を達成するためには、三大国がお互いを信頼できなければならぬ、そして彼等自身が正直にそれを希求しなければならない。彼等はまた中小国の信頼も勝ち得なくてはならない。ロシアは、小国の信頼を得ていないし、イギリスも同様である。私は平和を求め、そのためには戦うつもりである。私の意見では、我々はそれを得るであろう。」⁽¹⁵⁾これは、ソ連問題に関する二二日夜の会見で、対英協議のためロンドンに派遣されるデービスと話し合った後に、トルーマンが記したものであった。

チャーチルにこの楽観はなかった。彼は、派遣されたデービスに対して、バルカン問題全般に関するソ連の態度に怒りを爆発させていた。五月二六日夜から翌日未明にかけての会談で、チャーチルは、「オーストリアの一部とトリエステ地域」におけるチトー支配を許さないと決意を表明し、チトーは「全く頼りにならない共産主義者で、完全にモスクワの支配下にある」と断じていた。他方、彼は、ソ連がパーセント合意——ユーゴスラビアでの「五〇%対五〇%」、ブルガリアとルーマニアでの「八〇%対二〇%」——を守っていないこと、さらにはオーストリアでの英米ソによる共同管理を無視していることを非難していた。また、占領地域でのソ連のやり方に言及し、共産主義よりも恐ろしい「秘密警察とゲシュタポ的やり方」を押し付けていると批判していた。それから、彼はデービスに、対日戦のために欧州か

らの米軍撤退をしないように、トルーマンに伝えるように頼んだ。「もし米陸軍が欧州から撤収すれば、恐ろしいことになるであろう。欧州は打ちひしがれ、赤軍と共産主義のなすがままになるだろう。」⁴⁶

その一方で、チャーチルはアレキサンダーに対して、ヴェネツィア・ジューリアの南端であるポーラ地区への進攻を強行するように命令した。アレキサンダーが、これは挑発的で英米軍側を不必要な危険にさらすことになる」と批判していたにもかかわらず。五月二十九日の電報で、チャーチルは、しぶるアレキサンダーを叱責していた。

チトーに対する我々の要求と貴官の進攻作戦のなかに、ポーラを含めることに関して貴官が躊躇していることは、残念である。我々は、状況を同じ角度から見えないようだ。チトーの囲い込みに対して退かないこと、あるいは、バルカン諸国とロシアに、最終的には我々が武力を使えないという印象を与えないことが最も重要である。この重大時期に譲歩し始めれば、我々はどこまでも押しやられてしまう、と確信する。

チャーチルは、米大統領が「ポーラに大きな重要性を」感じており、「チトーに対応する上で、合衆国と政治的・軍事的に、正確に共同歩調をとるべき」であると、アレキサンダーを追いつめた。さらに、チャーチルは、ポーラ地区を含めなければ、「貴官が今準備を終わろうとしている主作戦」にアメリカが真剣な形で参加しないと述べ、英連邦軍だけでは十分な作戦的インパクトを得られないと、止めを刺そうとしていた。かくて、彼は、上陸作戦を念頭に、できるだけ速やかにポーラ地区への作戦を準備するように命令した。⁴⁷

第四節 「アンシンカブル」作戦とトリエステ危機

この緊迫した状況下で、チャーチルが命令していた対ソ奇襲戦争計画の研究が、統合計画本部（The Joint Planning Staff, J.P.）によつて、五月二二日付で一応の形で提出された。まず、J.P.は、欧州と中東での英ソ間の利害衝突という前提で、ロシアに「合衆国と英帝国の意思」を押し付ける、「すばやくかつ限定的な軍事的成功」を収める可能性を研究していた。すなわち、対ソ限定戦争の可能性である。しかし、チャーチルによつて、彼等の結論は失望する内容であった。J.P.によれば、ソ連側はいつでも全面戦争へのエスカレーションを「決定する」軍事的地位にあり、英側は「ポランドでの公平な取引」を求めるといふような限定的な作戦はできないと算定されていた。「わが政治的目標を確実にかつ永続的な結果の達成とするなら、総力戦でのロシアの敗北が必要になるだろう。」さらに、彼等は、この全面戦争は「長くそして犠牲の多い」ものと予想していた。要するに、彼等はこの軍事的冒険に反対していた。¹⁸⁾

最悪の場合、J.P.は、一大陸上奇襲作戦を採用すべきと提案していた。すなわち、バルト海沿岸を中心とする北東欧州において、英米側が、一四個機甲師団を含む約四七個師団をもつて、三〇個機甲師団を含む一七〇個師団（英米水準換算）を持つロシア軍に対して、大攻勢をかけるというものであった。彼等の計算によれば、明白な数적不利を補うため、この場所での作戦は、「バルト海での「英軍」海軍力の優位」（艦砲射撃と空母艦載機による攻撃）を利用して、進攻する英米陸軍の左翼を守りつつ、「敵の右翼を繰り返し攻撃」するとされていた。と同時に、J.P.は、ロシア軍はドイツ軍にとつて「てごわい相手」であったが、英米との戦争でもそうなるかと警告していた。そのうえで、全面戦争での「ロシアの排除」（the elimination of Russia）は、主要なロシア大都市部の占領とロシア軍の「決定的な敗北」によつてのみ可能となると断じていた。言い換えれば、英米の海軍力と戦略爆撃能力における圧倒的優位は、ソ連に対して

は致命的な一撃を加えることができないということであった。と同時に、ヒトラーの失敗を念頭に置いて、たとえ主要なロシア大都市部を占領したとしても、それが明白な結果に結びつかず、英米軍ではドイツ軍ほどの成功すら収められない、とJ Pは警告していた。「英米」連合では、一九四二年にドイツ人が侵攻したのと同様の地域に「同様の」速さで達するとは考えにくいし、その「ドイツ」侵攻でも決定的な結果は出なかった。」さらに、このような軍事的試みは、「非常に長期のプロジェクト」となり、アメリカの膨大な軍事的資源の投入と「ドイツの軍事的動員可能総人員とすべの西欧同盟国の再軍備と再編成」を必要とする、とJ Pは警告していた。要するに、彼等は、対ソ奇襲大戦争は成功しないし、ソ連を本格的に打ち破るには、英米と西欧各国の全国力投入のみならず、さらにはドイツ再軍備まで必要になると述べていたのである。^⑩

その一方で、J Pは、ロシアにはドイツのような戦略爆撃能力も潜水艦戦能力もなく、英米側の基地および船舶への大きな脅威はないと強調した。すなわち、ソ連側には、対英米勝利のシナリオは一切存在しないのであった。しかし、彼等は、ソ連が中欧への脅威となり、東地中海および中東でのイギリス権益に挑戦することはできると判断していた。特に、ロシア側は、反撃として、トルコのヨーロップ部分を席卷し、南東欧州での支配的状況を活かして、トルコの二海峡を封鎖し、英米側の黒海での海軍活動を妨げるであろうとし、さらにはギリシャへの脅威になるとしていた。そして、ソ連はベルシャとイラクを占領し、英米の石油資源に圧力をかける可能性があるとしていた。すなわち、イギリスの帝国防衛に深刻な影響を与えうると判断していた。^⑪

興味深いことに、J Pは、この研究の中で、日本とソ連の同盟が結ばれる可能性を考慮するように指導されていた。彼等は、英米軍が対ソ奇襲を行えば、日ソ間で戦争上の合意がなされ、その結果として、日本は本土防衛用兵力強化か「二号作戦」にみられるような対中国攻勢作戦を行えるようになるかと算定していた。さらに、J Pは、北東欧州で、英

米軍がこの冒険的作戦を実施すれば、「対日主要作戦」は延期せざるを得ず、その結果、対日戦は「手詰まり」状況になると予想していた。彼等は、また、「極東で」、ソ連軍が英米に対して攻勢作戦を行うことは「ありそうもない」としていた。⁵¹⁾

英帝国陸軍参謀総長アランブルック卿 (Lord Alanbrooke) の五月二四日付の日記によれば、彼自身がこの J P 報告を「注意深く」読み、その結果、成功は「全く不可能」と判断していた。五月三一日の会議で、COS は、「アンシンカブル」作戦についての討議を行い、アランブルックによれば、彼等は「これは考えられない ('unthinkable') と今まで以上に確信した。」⁵²⁾

このような悲観的意見にもかかわらず、チャーチルはトルーマンに対して、英米側がヴェネツィア・ジューリアであり挑発的な行動を取るよう提案していた。六月二日、チャーチルはトルーマンに、次のように伝えた。「ユーゴスラビアからのニュースはよくない。非常に唐突な要求が、英米部隊に対してなされ、明白な力の誇示となっている。」この時期は、チャーチル、トルーマンそしてスターリンが、次の三大巨頭会談をどこで開こうかと相談していた時期でもあった。チャーチルは、この時点で、トルーマンに対して、英米の力を見せるために、たとえ軍事衝突になっても、英米軍をトリエステに侵攻させ、ユーゴの脅威を取り除くことを提案した。

私の理解では、アレキサンダー元帥は、六月一日後ならいつでも、「英米軍を」進軍させて、敵を彼等の陣地から排除する用意ができています。三日以内に、チトーがあなたの大使と我々の「大使」に対して、我々が書き提示した合意内容に関して、満足のいく返答をしなければ、アレキサンダーに対して、彼の「軍事的」連絡線と「英米」連合軍政府の防衛のために、ベネジア・ギウリア「ヴェネツィア・ジューリア」のように必要な地域を力で占領す

ることを命令すべきである。

チャーチルは、今度は、ただの脅しでは、チトーの脅威を排除できないと強調した。さらに、彼はトルーマンに対して、この進軍に躊躇すれば、かえってソ連との世界戦争になるとし、そうなれば、かつてないまで欧州は破壊されてしまうと警告したのであった。

ロシア人が、今までは、静かにしているという事実は重要である。いったん我々がそれ「ロシア」に、我々をどこまでも後退させられると考えさせてしまえば、欧州には、世界がまだかつて経験したことがないほど恐ろしい戦争以外の将来はないであろう。

「アンシンカブル」作戦の悲観的内容にもかかわらず、チャーチルはトルーマンに対して、次のように述べていた。「我々にとつて有利な状況と現場で強力な戦線を見せれば、平和と正義のための満足のいくそしてしっかりした基礎を築けるかもしれない。」彼が提案しているのは、危険で大きな政治的・軍事的な賭けであった。⁵³⁾

しかし、米側は、ソ連側がすでに中・東欧のいくつかの主要問題で譲歩し始めていると判断していた。トルーマンはチャーチルに、彼の特別使節ハリー・ホプキンス (Harry Hopkins) がスターリンとの一連の会談で、ポーランド問題でいわゆる大成功を収めたと報告し、チャーチルですら、六月四日の電報で、ホプキンスが献身的な努力をしたことを認めていた。そこで、トルーマンは、対ソ協調のために、ドイツ占領地域で米軍が突出している地域から撤収し、ソ連軍にあげわたすと示唆した。チャーチルは、この米側の樂觀をひどく心配し、結果として、彼自身が孤立することにな

つた。六月四日の電報で、チャーチルは、トルーマンが提案しているこの譲歩が、欧州講和を完全に崩壊させると警告した。

米陸軍を中央地区の我々の占領線まで撤退させることが、ソ連の力を西欧の中心に導き入れ、我々と東方のすべて間に鉄のカーテンが下りてしまうことを、私は深く心配している。もしなされるなら、この撤退に伴って、世界平和の真の基礎となる多くの重大問題の解決がなされることを、私は希望している。いまだに、本当に重要なことは何も解決されていない、そしてあなたと私は、将来への大きな責任を担わなくてはならない。従って、私は「撤退の」予定が先延ばしされることをまだ希望している。しかし、これができないのなら、私は七月一五日なら受け入れる。

六月七日、チャーチルは、欧州の将来を次のように悲観していた。「私は、今ほど欧州の状況に関して心配したことはない。」しかし、英人のアレキサンダーすら、ユーゴスラビアに対する戦闘の可能性が消え次第、英米の上陸作戦部隊の解散を準備し始めていた。そして、八日の電報で、彼はチャーチルに、ウィーンへの英米代表のアクセスに関して、ソ連が妥協したことを告げた。⁽⁵⁴⁾

さらに、皮肉なことに、スターリンとチトーが、トリエステに関する英米の要求を受け入れたことで、対ソ戦争の可能性は消え、「アンシンカブル」作戦の発動もなくなってしまった。チャーチルが考えていた、熱戦という選択肢は消え、一九四一年のソ連勢力圏までの押し返すという彼の構想も大きく後退し始めた。スターリンが「アンシンカブル」作戦を知っていたかはまだ不明であるが、歴史家バナクの研究によれば、彼はチトーに対して、「トリエステ問題で、第三

次世界大戦を始めるつもりはない」と述べ、四八時間以内にチトー軍を撤収するように命令したという。チトーは基本的にスターリンの命令に従った。実は、彼は、のちに引き延ばし戦術を駆使し、その占領をすこしでも長引かせようとするが、結果的にはうまくいかなかった。六月九日、チトーは事実上「降伏」した。トルーマンは、この結果をスターリンの調停の成果と受け止め、後から見れば短期的なものとなったが、来るポツダム会談で、スターリンとの間で受け入れ可能な戦後世界秩序の樹立が可能と考えるようになっていた。チャーチルの観点からは、アメリカの軍事関与が確定的で、かつ当該状況下で軍事的にソ連側が明確に不利であるというふたつの条件を満たす、便利な政治的・軍事的問題が消滅してしまつた。⁽⁵⁶⁾

ここにおいて、六月八日付のチャーチル宛のメモで、C O Sはソ連側の陸上兵力と戦術航空戦力における優位を強調し、この軍事的冒険の無謀さを悟らせようとした。すなわち、陸上兵力の比率では、一対二・五であり、兵力量では、英米連合側は、アメリカが六四個師団、英連邦が三五個師団、さらに四個師団の亡命ポーランド政権軍で、全部あわせると二三個機甲師団を含む一〇三個師団であり、これらに対して、ロシア軍は英米標準で、三六個機甲師団を含む二六四個師団であった。戦術航空戦力の比率では、一対二であり、兵力量では、英米連合側は、アメリカが三四八〇機、英連邦が二二七〇機、そして亡命ポーランド軍が一九八機で、全部で六〇四八機であり、これらに対して、ソ連軍は一八〇二機と算定されていた。しかし、英米側は、戦略爆撃能力に関しては圧倒的な優位を保っていた。英米連合側は、アメリカは一〇〇八機、英連邦が一七二二機、そして亡命ポーランド軍が二〇機であり、これらに対して、ロシア側は無視できる内容と判断されていた。C O Sはチャーチルに、この軍事的冒険は不可能と警告した。

従つて、我々の見解では、いったん戦争が始まれば、素早く限定的な成功を収めることは我々の能力外であり、そ

して厳しい勝ち目の長い戦争に引きずり込まれるに違いない。さらに、アメリカ人達が「この戦争に」うんざりして無関心となり、太平洋戦争という磁石に引つ張られ始めるなら、これらの勝ち目は空想的なものとなるであろう。

この結論でも、チャーチルを説得することは難しかった。³⁶

アレキサンダーのウィーンに関する楽観は長続きしなかった。六月九日の電報で、チャーチルはこのことをトルーマンに伝えた。英米代表のウィーン駐留をソ連側が拒否したことは、ソ連のオーストリア支配ではなく、欧州の東半分でのソ連勢力圏の拡張を意味すると、チャーチルは主張した。

我々のウィーン使節は、六月一〇日か一一日までに撤収するように、トルブキン元帥に命令された。彼等は、厳密な市境界外のすべての視察が許可されておらず、「英米」連合側には一飛行場だけが「利用を」許可されている。ここは、オーストリアの首都であり、合意によって、国自体と同じく、「四大国による占領のために」四つの地区に分割される予定である。しかし、ロシア人達以外は、そこでなんの権力も持っておらず、通常の外交的特権すら許されていない。この問題で譲歩すれば、我々はオーストリアがソ連化した欧州の半分に組み入れられると見るべきである。

チャーチルはトルーマンに対して、このウィーンの状態とソ連によるドイツでの英米軍の撤退要求を結び付けて考えるように求め、さらにベルリンのソ連化も付け加えていた。さらに、全面戦争をもいとわぬ強い決意を持って、英米が協力して対決するという前の立場に回帰するように、チャーチルはトルーマンに懇請していた。「オーストリアに関す

る解決がなされるまで、中央欧州戦線での「米軍の」撤退を拒否したほうがいいのではないか？たしかに、最低限、「占領」地域に関する全体合意は、同時に実施されねばならないのではないか？」とはいえ、六月九日、チャーチルはアレキサンダーに対して、後者の判断で、ウィーンから英軍事代表は米軍事代表とともに、ソ連側に対して英米の抗議を明白にしつつ、撤退してもかまわないと許可した。⁵⁷⁾

第五節 チャーチルの壮大な構想の崩壊

トリエステ危機が一応の解決をみたあと、チャーチルは次の「引き金」候補を探すがごとく、C O S S に対して「純粹仮定上の不足の事態」に対応する研究を用意するように、いくつかの作業用質問を提示した。すなわち、第一に、「アメリカ人が彼等の「本来合意された占領」地域に後退し、彼等の部隊の大部分を米本土や太平洋に移動した場合に、ロシア人は北海と大西洋まで勢力を拡張できる」のか。第二に、フランスとベネルクス三国がソ連の侵攻に対して無力であるとするれば、英国は英本土を防衛できるか。第三に、英本土防衛に必要な航空、海軍、陸軍兵力とはどのようなものか。第四に、「デンマークの飛行場」を確保した場合、あるいはフランスかベネルクス三国で対ソ防衛用に橋頭堡を確保する場合の軍事的メリットはどのようなものか。アランブルックの六月一日付の日記によれば、チャーチルは自らの内閣に対して、「欧州情勢に関する長くひどく憂鬱な報告」を行ったという。そのなかで、首相は、歴史上一回の例外を除けば、欧州の西方面にロシアがこれ以上進出したことがないほど、その勢力を拡張したと強調した。そして、「いつでも」ロシアは、欧州の残りを席卷し、イギリスを英本土に追いやることができる、と彼は嘆いていた。チャーチルは、米軍が欧州から撤収を続けていることを悲しみ、「彼等が早く撤収すればするほど、彼等はここにふたたび「ソ連

と戦うために「早く帰ってくる必要があるであろう」と予想していた。最後に、彼は、こう述べて、報告を締めくくったという。「彼の人生において、現在よりも、欧州情勢が心配なことはなかった。」⁽⁵⁸⁾

六月一日の電報で、チャーチルはトルーマンに、チトーやソ連だけでなくフランスも加えた「土地収奪者達」(land grabbers) に対抗するため、一時的な英米軍事勢力圏を設定することを提案していた。レバント地方と西イタリアでの仏伊間の領土論争を加えて、チャーチルはこう述べていた。「全体として、レバント、ベネジア・ギウリア「ヴェネツィア・ジュリア」そしてポーラと西イタリア「の状況」は、土地収奪者達にはうまくいっていない。が、我々は、これらの「状況」を、「英米が」共同して対決する」(united we stand) をモットーとするより大きな「軍事的勢力」圏に適用することが可能である。」⁽⁵⁹⁾

しかし、米政府には、一時的とはいえ、合意線を越えて英米軍事勢力圏を設定するつもりはなかった。トルーマンは、チャーチルほど絶望的でも悲観的でもなかった。彼は、ロシアとの戦後協調をまだあきらめておらず、軍事的圧力でソ連に対応するよりも、ポツダム会談に期待をかけていた。六月一二日の電報で、トルーマンは、「他の問題を解決する圧力に使用する目的で、ソ連ゾーンからの米部隊撤退を遅らせることはできない」とし、同会談前に米軍兵力を撤退するとチャーチルに通告した。そして、彼はチャーチルに、米軍が二日に独塊の突出地域から撤退するとスターリンに伝える電報草稿を、承認することを要求した。この決定は、チャーチルの壮大な構想を完全に崩壊させてしまった。⁽⁶⁰⁾

六月一四日の電報で、チャーチルはトルーマンにこう伝えることで、後者の決定を皮肉った。「あなたの行動が、長期的に欧州での永続的な平和を可能にするのを、心から希望している。」戦中の外交をよく知っていた彼は、このドイツ占領ゾーン区分は、ローズベルト大統領との「短くかつ英米合意だけを念頭にした」取り決めにすぎないと示唆していた。彼は、米軍が突出地域から撤退するなら、英軍もそうせざるを得ないとわかっていた。しかし、彼は、一方的

な譲歩という形は避け、英米軍の撤退と引き換えに、オーストリアの英ゾーンを占拠していたソ連軍を撤退させるのに使用することを提案した。六月一四日の電報で、トルーマンはチャーチルに対して、スターリンに二一日から米軍は撤回すると通告したことを伝えた。余裕からか、一六日の返電で、スターリンは、モスクワでの対独戦勝記念式典への將軍連の参加のため、七月一日に、撤退開始日を遅らせるように要請してきた。六月一六日の電報で、チャーチルは、カナダ、オーストラリア、そしてニュージールランド首相に対して、ポツダム会議に關しての厳しい見通しを伝えた。「これは、困難で致命的な会議になるであろう。欧州の将来、そしていや全世界の平和「の行方」が我々の討議の結果にかつてゐる。我々はよい決断にたどり着けるかもしれないと信じる。」一八日の電報で、トルーマンはチャーチルに、米軍司令官達に対して七月一日から撤退するように命令したと伝えた。⁽⁶⁾

アメリカの決定に失望したものの、チャーチルは、英連邦軍だけで、将来の望ましい欧州秩序を実現しようと決心していた。六月一八日のアレキサンダー宛の電報で、次のように彼は伝えた。

貴官指揮下のイタリアーオーストリア地域の軍事的弱体化 (denudation)、そして特に、第一〇山岳「師団」以外の全米軍師団の撤退を深く憂慮している。合衆国は、イタリヤ問題での主導権をとろうと発言力を強めているが、私個人としては、これに反対していない。しかし、我々は、このような不適切な兵力で、チトーとの紛争やイタリヤ自体での「それ」の矢面に立たされてはならない。全米軍が撤退して、大きな責任が政治的に我々にのしかかっている。

この観点から、チャーチルはアレキサンダーによる樂觀的な必要兵力算定を批判した。「貴官の電報で、私を不安にさ

せているのは、貴官がこのすべて「米軍撤退」に合意しているように思われることであり、一二月以後に貴官に残される部隊で十分であると想定していることである。「増援が必要な場合に、」我々がその地域「ギリシヤ」で得たすべてを放棄でもしないかぎり、しばらくギリシヤ駐留部隊を削減できる可能性はない。」チャーチルは、彼自身がこの問題をCOSと議論すると示唆した。⁽⁶²⁾

これに対して、アレキサンダーは、ヴェネツィア・ジューリアでできるだけ多くの米軍確保につとめると返答した。六月一九日の電報で、アレキサンダーは、COSが全戦線で兵力不足に苦しんでいると指摘したものの「イタリアでの強力な部隊、特により強力な米軍を歓迎するであろう」と述べた。さらに、彼は、次のように述べて、アメリカ人のなかには彼の意見に賛同する者がいるとした。「あなたへの情報として、カーク米大使は欧州でアメリカが強力な部隊を欧州に維持する必要性を熱烈に感じている。」米軍撤退を踏まえたのか、スターリンは、六月二日の英米による最後通牒は「ユーゴ人民の最低限の願い」を尊重してないと非難し始めた。英米側にとつて軍事的バランスが悪化するなかで、チャーチルは、ポツダム会談まで、首脳間での意見交換を延期しようとしていた。⁽⁶³⁾

ポーランド問題に関して、七月二日付の電報で、トルーマンはチャーチルに対して、新しい暫定内閣を同時に承認するように提案し、この政権はヤルタでの決定と矛盾していないと主張した。彼には、ヤルタ合意を変更するつもりはもはやなかったのである。七月三日の返答で、チャーチルは、この提案が唐突になされたことを批判したものの、この問題でソ連と対立する気はうせ、この承認に合意した。これを受け取ったトルーマンは、承認のタイミングを遅らせることには合意した。⁽⁶⁴⁾

失意のチャーチルをすこし安心させたのは、J.P.がその七月一日の報告のなかで、ロシアがかなり遠い将来に大量のロケット兵器やそれに類する新兵器を獲得するまで、英本土を危機に陥れるような脅威は存在しないとしたことであ

ろう。⁽⁶⁶⁾

むすびにかえて

「アンシンカブル」作戦を、ポーランド問題だけに結びつけるのは問題がある。同作戦は、チャーチルによる戦後欧州・中東秩序の一大転換、すなわちパーセント合意とヤルタ合意すら破棄して、事実上、ソ連勢力を一九四一年当時の勢力圏まで押し返そうという壮大な構想と直結していたと判断されるべきである。この構想を実現するために、彼がまず期待したのは、英米ソ間で合意した対独作戦地域の線から、大きく突出していた米英陸軍の存在であったが、それでは、ドイツ問題でのソ連の譲歩はともかく、すでにソ連側に占領された東欧地域を確実に取り返すことは不可能であった。

この観点から、チャーチルは、トリエステ危機を、その壮大な構想の実現のために最大限利用しようとした。彼は、ソ連を東欧、地中海から放逐するため、熱戦を恐れず、軍事的衝突という圧力をかけた。いや、熱戦の引き金となることすら期待していたのかもしれない。しかも、彼から見れば、アメリカ軍が全面的に英連邦軍を支援し、必要とあれば共に戦ってくれるという保証がなければ、彼の壮大な構想は実現するわけもなく、米軍を共同作戦にコミットさせるには、同危機の深刻化は絶好の機会と写った。ポーランド問題では、アメリカの政府と軍部に、積極的に軍事的関与をさせることは不可能であった。「アンシンカブル」作戦の研究指令に象徴されるように、彼は、必要とあれば最悪の場合、英米軍がソ連に対して一大奇襲作戦を実行し、第三次世界大戦を引き起こす覚悟で、それを行っていた。少なくとも、彼にとつては、冷戦の開始以前に、熱戦の可能性や覚悟があった。もちろん、それは、ソ連とユーゴ側の妥協により、その引き金は引かれることはなかったし、英軍自体がこの作戦の成功をうたがったため、熱戦に発展することはなかった。

た。しかし、チャーチルが熱戦を覚悟してまでも、パーセント合意とヤルタ会談で決められた英米ソ間の欧州での事実上の勢力圏線引きを解消しようとしたことで、英米ソ間の関係が単なる確執のレベルから本格的対決のレベルへと性格的な変化が生じた。これを媒体として、熱戦ではないが、最悪の場合熱戦をも辞さない形での対決という対抗姿勢が英軍内部に根付いていく。ふりかえれば、英軍首脳は、なんとかチャーチルの冒険主義的賭けを思いとどませたものの、トリエステ危機とその終了期に発生したトルコ問題を通じて、ソ連対英米という図式による、勢力圏防衛としての冷戦の形を恒常化させていった。チャーチルの熱戦という圧力の結果、英軍部は彼とは違う形での対応を強いられ、冷戦という形を提示したと言えなくもない。とはいえ、あとから見れば、彼等にとつて、冷戦の形を明白にするには、「アメリカによる核保有という切り札が必要となった。つまり、彼等にとつて、現実はともかく認識の上では、「アンシンカブル」作戦は、アメリカの核保有という一大事件により、考えられる作戦すなわち「シンカブル」作戦となったのであった。英外務省にしても、この形の恒常化を避けるため一九四六年終わり頃まで努力したものの、結局はこの恒常化を受け入れた。ただ、彼等にしても、この形が恒常化しつつあることは、現実として受け入れていた。（トルコ問題と関連して、英米両軍がどのように冷戦の形とルールを定義付けていったかについては、近々、別の機会に検討したい。）

アメリカのトルーマン新政権にとつても、トリエステ危機への関与は冷戦への道を決定する上で、大きな一歩となった。この危機がなければ、トルーマン政権がローズベルト政権の対欧州、対地中海政策すなわち不干涉政策を、これほど早くかつ完全なまでに放棄したかどうかは疑わしい。トルーマンがポーランド問題でのソ連との対決に躊躇していたがゆえに、トリエステ危機を通じて、ソ連との対決を地中海と欧州で行うことを受け入れたことは、大きな進展であった。確かに、トリエステ危機の時点で、彼等が冷戦という形を受け入れることはなかった。まだ、太平洋での戦いは終了しておらず、核兵器は完成していなかった。トルーマンからすれば、それ以前に、ソ連との対立を決定的に激化する

ことは避けたかった。彼の回想録は、次のようにトリエステ危機をめぐる英米首脳の方策の違いを表現している。

私は、我々がもうひとつの世界戦争に巻き込まれる形で、バルカン半島「の問題」に関与しなくなかった。私は、ロシア人に行きだけ早く対日戦に参加させ、多くのアメリカ人の命を救うことに必死だった。

一方、チャーチルは、ギリシャ、エジプトそして中東でのイギリスの影響力を維持するために、東地中海地域の英支配を守ろうといつも必死だった。私は、彼が取ったこの立場に関して、彼を非難することはできない。私が彼の立場だったら、おそらく彼がそうしようとしたごとく、やろうとしたであろう。⁶⁶

実は、この回想録に描かれているほど、トルーマンが関与に消極的だったとは思えない。チトーおよびソ連との方が一対決に備えて、アメリカが援軍準備をしていたことは、これに反する事実である。危機が回避できたのは、皮肉なことに、ソ連側の自重ゆえであった。しかし、強調すべきは、この援軍準備が、けつして彼にとつての冷戦の開始を意味するものではなかったことである。とはいえ、そうなることにそれほど時間はかからなかったが。

原爆使用と日本の降伏というほんの一〇日間にも満たない間に起こった、外交軍事上の一大変革のあと、トルーマンは世界戦争に巻き込まれない形という前提すら放棄し、地中海でのイギリス勢力圏防衛に積極的に関与していった。それには、トルコ問題さらに日本をめぐる勢力圏問題という契機もあった。

米軍の観点からすれば、英米軍共同の形でチトー軍と対峙したことで、のちにトルコ問題での英米共同の対処という冷戦の形の恒常化が定着していく道が開かれた。(もちろん、米軍のトルコへのアプローチは、英軍のそれとは違うが。)米務省にとつては、ソ連との世界戦争という影を感じた初めての体験であった。こののちしばらく、彼等は、それを

避けつつ、さらに対ソ協調の道を探そうとするが、結局成功することなく、冷戦とそれにもなう封じ込め政策という形を受け入れる。

英米の政府と軍部にとつて、トリエステ危機は第二次世界大戦の延長上の歴史的事件でもなければ、冷戦の始まりの事件でもなかった。それは、第三次世界大戦の危機を初めて感じさせた事件となった。それは、冷戦への道を用意した一方で、現実とはならなかったものの、熱戦に関する現実的恐れを定着させた最初の事件となったのである。それは、冷戦終了まで、世界にまわりついたままであった。

- (1) Julian Lewis, *Changing Direction: British Military Planning for Post-war Strategic Defence 1942-47* (Second Edition) (London, 2003). 本論文作成に当たっては、八十田博人・松本佐保両氏から貴重な援助を受けました。感謝申し上げます。
- (2) *Ibid.*, pp. xxxvii-xxxviii. 「アンシンカブル」作戦が解禁されることで、ルイスは、自分の著書の改訂版を書くことを強いられた。
- (3) これまでの研究の中でトリエステ危機に関して、傑出しているのはこれらの研究である。Roberto G. Rabel, *Between East and West: Trieste, the United States and the Cold War, 1941-1954* (Durham, 1988); Richard S. Dinarro, "Glimpse of an Old World Order? Reconsidering the Trieste Crisis of 1945," *Diplomatic History*, Vol. 21, No. 3 (Summer 1997), pp. 365-381. とは、これ、これらの研究は、「アンシンカブル」作戦の解禁以前の研究であり、この要因を当然ながら考慮していない。同作戦を広い見地から検討した研究に、鈴木陽一「想像を絶する作戦——チャーチルのロシア急襲計画一九四五年七月一日」『国際政治』第一四四号(二〇〇六年二月)六九—八四頁。また、本論文では、スペース上の問題ゆえに、おびただしい数の関連研究書の紹介を省略する。
- (4) U.S. Military Attache (MA), London (Prime Minister-PM) to President of the United States, No. 905 (March 8, 1945) Folder #99, "Prime-Pres. Roosevelt-January-April, 1945," Records of U.S. JCS, Chairman's File, Admiral Leahy, 1942-48, RG 218, Box 16, National Archives II, Washington D.C.
- (5) "Note written by PM during Balkans conversations with Marshal Stalin at the Kremlin, October 9, 1944"; Russian version of "Note written by PM during Balkans conversations with Marshal Stalin at the Kremlin, October 9, 1944"; Churchill's personal memo "Balkans" (October 11, 1944) PREM

- 3/66/7, formerly Public Record Office, now National Archives, Kew, London.
- (9) US MA, London (PM) to President, No. 905 (March 8, 1945) Folder #99, "Prime-Pres. Roosevelt-January-April, 1945," Chairman's File, 1942-48, RG 218, Box 16. See also PM to President, G-907 (March 10, 1945) in Warren F. Kimball ed., *Churchill & Roosevelt: The Complete Correspondence: Vol. III, Alliance Declining February 1944-April 1945* (Princeton, 1984) pp. 551-2; President to PM, R-713 (March 11, 1945), R-714 (March 11, 1945), R-715 (March 12, 1945) in *ibid.*, pp. 560-563; President to PM, R-718 (March 15, 1945) in *ibid.*, p. 568; PM to President, G-912 (March 16, 1945) in *ibid.*, p. 571.
- (7) Churchill to Foreign Secretary, M 196/5 (March 11, 1945); Eden to PM, PM/45/111 (March 15, 1945) PREM 3/495/5.
- (8) PM to President, G-925 (March 27, 1945) in *Churchill & Roosevelt: The Complete Correspondence: Vol. III*, pp. 587-589; President to PM, R-729 (March 29, 1945) in *ibid.*, p. 594; President to PM, R-730 (March 29, 1945) in *ibid.*, pp. 595-597; PM to President, G-928 (March 30, 1945) in *ibid.*, p. 598; President to PM, R-732 (March 31, 1945) in *ibid.*, pp. 601.
- (9) PM to President, G-931 (April 1, 1945) in *ibid.*, p. 605. 駐英大使「ジョン・ウィnant (John Winant) は、ロースベルトに対して「もしロシア人達が強硬になり、ルブリン政権の承認をサンフランシスコでの『国連創設会議』に出席するための条件にすれば、チャーチルは会議に欠席する決意をこぼさるゝ」と警告した」と警告した。MA, London (Winant) to President, No. 2117 (April 2, 1945) "President-Winant, 1945," Map Room File, Box 11, the Franklin D. Roosevelt Library. Hyde Park, NY; President to PM, R-733 (April 4, 1945) in *Churchill & Roosevelt: The Complete Correspondence: Vol. III*, pp. 607-608; PM to President, G-934 (April 5, 1945) in *ibid.*, p. 613; President to PM, R-736 (April 6, 1945) in *ibid.*, p. 617.
- (10) *Churchill & Roosevelt: The Complete Correspondence: Vol. III*, pp. 609-612; Leahy to President, Out 344 (April 4, 1945); Harriman to the President, No. 1922 (April 3, 1945); Leahy to President, a draft of No. 402 (April 11, 1945); Harriman to President, No. 9544 (April 12, 1945) Map Room File, Box 23, "Trip to Warm Springs, Ga., 29 March-13 April, 1945"; Roosevelt to Stalin (April 11, 1945) Map Room File, Box 9, Folder #1, "PDR-Stalin Correspondence (Typewritten Copies)," FDR Library.
- (11) G.A. Lincoln, "Memo for Record: Subject: Conference with State Department on CCS 739/1 which pertains principally to the occupation of the Venezia-Giulia" (April 24, 1945); "Appendix: Draft Letter from Secretaries of War and Navy to Secretary of State" (undated) Folder #76, "Tito (Yugoslavia) (sic)," Records of US JCS, Chairman's File, 1942-48, RG 218, Box 12.

- (12) G.A. Lincoln, "Memo for Record" (April 24, 1945), "Appendix: Draft Letter" (undated), Folder #76, "Tito (Yugoslavia) (sic)," Chairman's File, 1942-48, RG 218, Box 12.
- (13) *Ibid.*, 機密書類本文の####°.
- (14) *Ibid.*
- (15) "Copy of letter from the Secretary of State [Acting Grew] to the Secretary of War [Stimson] (April 26, 1945)," Folder #76, "Tito (Yugoslavia) (sic)," Records of US JCS, Chairman's File, Admiral Leahy, 1942-48, RG 218, Box 12; U.S. Department of State, *Foreign Relations of the United States, Diplomatic Papers, 1945, Vol. IV, Europe* (Washington D.C.: USGPO, 1968) p. 1124. (Hereafter, this series will be abbreviated as *FRUS*.)
- (16) Memo from Lincoln to Commander Penny (April 27, 1945), Folder #76, "Tito (Yugoslavia) (sic)," Records of US JCS, Chairman's File, 1942-48, RG 218, Box 12; U.S. *FRUS, 1945, IV*, p. 1125.
- (17) *Ibid.*, pp. 1127-1128; p. 1132.
- (18) *Ibid.*, pp. 1129-30.
- (19) Foreign Office (FO) to Washington, No. 3942 (April 20, 1945) PREM.3/495/5.
- (20) MA, London (Prime Minister-PM) to President, No. 22 (April 30, 1945), Folder #98, Chairman's File, Admiral Leahy, 1942-48, RG 218, Box 16; *FRUS, 1945, IV*, p. 1132; US MA, London (PM) to President, No. 24 (April 30, 1945), Folder #98, Chairman's File, 1942-48, RG 218, Box 16; AFHQ, Caserta, Italy (Alexander) to War Department (WD) (originally to CCS, COS and SHAEF), FX 68304 (NAF 936) (April 30, 1945), Folder #76, "Tito (Yugoslavia) (sic)," Chairman's File, 1942-48, RG 218, Box 12.
- (21) Caserta (MacMillan) to FO, No. 756 (May 1, 1945); AFHQ, Caserta, Italy (Alexander) to WD (originally to CCS, COS and SHAEF), FX 69610 (NAF 943) (May 2, 1945); COS to AFHQ (Alexander) (Info: JSM), COSMED 220 (May 2, 1945), Folder #76, "Tito (Yugoslavia) (sic)," Chairman's File, 1942-48, RG 218, Box 12.
- (22) *FRUS, 1945, IV*, pp. 1132-1135; "Memo for Admiral Leahy" (May 3, 1945) and Leahy's handwriting in this memo; WD (Marshall) to AFHQ, Caserta, Italy (McNarey), WAR 76530 (May 3, 1945); AFHQ, Caserta, Italy (McNarey) to WD (Marshall), F 70414 (May 4, 1945); AFHQ, Caserta, Italy (Alexander) to WD (originally to CCS, COS and SHAEF), FX 70677 (NAF 947) (May 4, 1945), Folder #76, "Tito (Yugoslavia) (sic)," Chairman's File, 1942-48, RG 218, Box 12.

- (31) *FRUS, 1945, IV*, p. 1138; p. 1144. AFHQ, Caserta, Italy (Alexander) to WD (originally to CCS, COS, SHAEF, Eisenhower and Clark), FX 71153 (NAF 948) (May 5, 1945) Folder #76, "Tito (Yugoslavia) (sic)," Chairman's File, 1942-48, RG 218, Box 12.
- (32) US MA, London (PM) to President, No. 34 (May 6, 1945) Folder #98, Chairman's File, 1942-48, RG 218, Box 16; COS (45) 128 Mtg. (May 15, 1945) CAB 79/33.
- (33) *FRUS, 1945, IV*, pp. 1146-48, p. 1151. See also AFHQ, Caserta, Italy (Alexander) to WD (originally to CCS, COS and SHAEF), FX 72855 (NAF 954) (May 9, 1945) Folder #76, "Tito (Yugoslavia) (sic)," Chairman's File, 1942-48, RG 218, Box 12.
- (34) *FRUS, 1945, IV*, pp. 1152-1154.
- (35) *Ibid.*, pp. 1154-1155.
- (36) US MA, London (PM) to President, No. 40 (May 11, 1945) Folder #98, Chairman's File, 1942-48, RG 218, Box 16.
- (37) US MA, London, England (PM) to President, No. 41 (May 11, 1945) Folder #98, Chairman's File, 1942-48, RG 218, Box 16.
- (38) *Ibid.*
- (39) President to PM, No. 34 (May 12, 1945) PREM 3/495/1; PM to President, No. 45, (May 12, 1945) PREM 3/495/1 五頁一四頁「チャーチル将軍 宛電」の要録を回顧した。Telegram from PM to New Zealand (PM.) (San Francisco) (WINCH No. 4 or F.O. Serial No. 684) (May 14, 1945) CHAR 20/219/14, Churchill College, Cambridge University.
- (40) PM to President, No. 45 (May 12, 1945) PREM 3/495/1.
- (41) P.M. to New Zealand (P.M.) (San Francisco), (WINCH No. 2 or F.O. Serial No. 682) (May 13, 1945) CHAR 20/219/11; PM to President, No. 48 (May 14, 1945) CHAR 20/219/16; PM to President, No. 49 (May 14, 1945) CHAR 20/219/17-19.
- (42) CCS to AFHQ, Caserta, Italy (Alexander) (also to BISM, SHAEF and COS), WARRX 81318 (May 12, 1945) Folder #76, "Tito (Yugoslavia) (sic)," Chairman's File, 1942-48, RG 218, Box 12.
- (43) AFHQ, Caserta, Italy (Alexander) to WD (originally to CCS, COS, Clark and SHAEF), FX 73972 (NAF 960) (May 11, 1945); CCS to AFHQ, Caserta, Italy (Alexander) (also to BISM, SHAEF and COS), WARRX 81318 (May 12, 1945); "Memo by the U.S. Chiefs of Staff" (undated); "Memo by the U.S. Chiefs of Staff" (May 11, 1945) Folder #76, "Tito (Yugoslavia) (sic)," Chairman's File, 1942-48, RG 218, Box 12.
- (44) President to PM, No. 37 (May 14, 1945) CHAR 20/219/29.

- (37) Washington to FO (Eden in DC to PM), No. 3344 (May 14, 1945) (D. May 14, R. May 15) CHAR 20/219/37; Washington to FO (Eden in DC to PM), No. 3343 (May 14, 1945) (D. May 14, R. May 15) CHAR 20/219/44.
- (38) PM to President No. 51 (May 15, 1945) CHAR 20/219/36; FO to Washington (PM to Eden) (May 16, 1945) CHAR 20/219/58; President to PM, No. 42 (May 16, 1945) Chairman's File, 1942-1948, Folder #76 "Tito (Yugoslavia)," RG 218, Box 12.
- (39) PM to Lord Halifax (May 14, 1945) CHAR 20/219/25; PM to President, No. 39 (May 14, 1945) CHAR 20/219/33; Washington to FO (Eden in DC to PM), No. 3342 (May 14, 1945) (D. May 14, R. May 15) CHAR 20/219/41-3; PM to Stalin, No. 2624 to Moscow (May 15, 1945) CHAR 20/219/52; War Cabinet Office (PM) to Alexander (May 16, 1945) CHAR 20/219/54; AFHQ, Caserta, Italy (Alexander) to WD (also to CCS, COS, and SHAEF) FX 76414 (NAF 971) (May 16, 1945) & FX 76415 (NAF 972) (May 16, 1945) Folder #76, "Tito (Yugoslavia) (sic)," Chairman's File, 1942-48, RG 218, Box 12.
- (40) Marshall to President (May 17, 1945); Marshall to President (May 18, 1945) Chairman's File, 1942-48, Folder #125 "Memo to & from President, 1945," RG 218, Box 20.
- (41) Washington to FO (Eden to PM), No. 3387 (May 16, 1945) CHAR 20/219/63; PM to Tito (May 16, 1945) CHAR 20/219/66. ユーナーベンツチャーチナビボロフ「スターリンの博識や気遣いを知らずだ。」 Truman to PM, No. 41 (May 16, 1945) CHAR 20/219/72.
- (42) PM to Truman, No. 52 (May 19, 1945) CHAR 20/219/89; Robert H. Ferrell ed., *Off the Record: The Private Papers of Harry S. Truman* (N.Y., 1980) pp. 31-32. ウォルト・H・インリックス著・麻田貞雄訳『増補トルー大使と日米外交』(ナルー基金、二〇〇〇年)三三八頁。
- (43) President to PM, No. 44 (May 21, 1945) CHAR 20/219/104.
- (44) PM to President, No. 53 (May 21, 1945) CHAR 20/219/107; President to PM, No. 45 (May 21, 1945) CHAR 20/219/71; FRUS, *The Conference of Berlin 1945, Vol. I*, p. 20; AFHQ, Caserta, Italy (Alexander) to WD (also to CCS, COS, SHAEF, and 15 th Army Group) FX 83202 (NAF 996) (May 27, 1945) Folder #76, "Tito (Yugoslavia) (sic)," Chairman's File, 1942-48, RG 218, Box 12.
- (45) Ferrell ed., *Off the Record*, p. 35.
- (46) FRUS, *The Conference of Berlin 1945, Vol. I*, pp. 66-67.
- (47) Office of the Cabinet, London to Alexander (PM to Alexander) (May 29, 1945) CHAR 20/220/22.
- (48) War Cabinet, Joint Planning Staff, "Operation 'UNTHINKABLE'" (Final) (May 22, 1945) CAB 120/691. 鈴木隆一・池田亮阿氏のちかぢく

の一連のファイルを利用するにたがった。

(49) Ibid. JPは、侵攻に関して、ふたつの主攻方面を考えていた。北は、シユテッテシーシユナイテムールビトコシユチュ (Stetin-Schneidemann-Bydgoszcz) の線であり、南は、ライプツヒヒコットブスホズナン及びブレスラウ (Leipzig-Cottbus-Poznan & Breslau) の線であった。ドイツとポーランドの地名に関して、クリス・スビルマン氏の援助を得た。

(50) Ibid.

(51) Ibid.

(52) Field Marshal Lord Alanbrooke, Alex Danchev and Daniel Todman eds., *War Diaries, 1939-1945* (London, 2001) pp. 693-695.

(53) PM to President, No. 64 (June 2, 1945) CHAR 20/220/45-46.

(54) PM to President, No. 72 (June 4, 1945) CHAR 20/220/72-3; US MA, London (PM) to President, No. 78 (June 7, 1945) Folder #98, Chairman's File, 1942-48, RG 218; Box 16; A.F.H.Q. (Alexander) to COS and U.S. JCS via JSM, FX 88056 (June 5, 1945) Folder #76, "Tito (Yugoslavia) (sic)," Chairman's File, 1942-48, RG 218; Box 12; AFHQ to AMSSO (Alexander to PM), F. 89658 (June 8, 1945) CHAR 20/220/118.

(55) Ivo Banac, *With Stalin against Tito: Communist Splits in Yugoslavia Communism* (Ithaca, 1988) p. 17; Dinaro, *op. cit.*, p. 378.

(56) COS to PM. (June 8, 1945) CAB 120/691.

(57) PM to President, No. 81 (June 9, 1945) CHAR 20/220/123; AMSSO to AFHQ (PM to Alexander), No. 3664 (June 9, 1945) CHAR 20/220/124.

(58) Churchill to General Ismay and COS (June 10, 1945) CAB 120/691; Alanbrooke, *War Diaries, 1939-1945*, p. 697.

(59) PM to President, No. 84 (June 11, 1945) CHAR 20/221/12.

(60) President to PM, No. 70 (June 12, 1945) CHAR 20/221/19-20.

(61) PM to President, No. 87 (June 14, 1945) CHAR 20/221/27; President to PM, No. 71 (June 14, 1945) CHAR 20/221/32; Stalin to PM (June 17, 1945) CHAR 20/221/72; D.O. to Canada, Australia, NZ (GOVTs.) (PM to PM), No. 137(Canada), No. 197 (Australia), No. 138 (NZ) (June 16, 1945) CHAR 20/221/51; President to PM, No. 77 (June 18, 1945) CHAR 20/221/74.

(62) Cabinet Office (PM) to Alexander (June 18, 1945) CHAR 20/221/71.

(63) Alexander to PM, MA 1109 (June 19, 1945) CHAR 20/221/82; Stalin to PM (June 21, 1945) CHAR 20/221/86; PM to Stalin (June 25, 1945) CHAR 20/221/105.

- (49) President to PM, No. 83 (July 2, 1945) CHAR 20/222/9; PM to President, No. 101 (July 3, 1945) CHAR 20/222/11; President to PM, No. 85 (July 3, 1945) CHAR 20/222/15.
- (50) JP, COS, "Operation 'UNTHINKABLE'" (Final) (July 11, 1945) CAB 120/691.
- (51) Harry S. Truman, *Memoirs by Harry S. Truman, 1945: Year of Decisions* (N.Y., 1955) p. 245.